

忘れないで  
ヒロシマ  
ランメル  
幸

人間は皆、戦争の無意味さをよく知っています。しかし、残念ですが、人間は過去の戦争の歴史から何も学んでいないと認めざるを得ません。今日、お互いに励まし合って元気になっても、将来の事が分からないので、人間は悩み不安になり、心配します。ですから、不安と心配からの解放こそ、現代人にとって一番大切な事なのです。

何年か前に沖繩で聞いた話です。

今まであまり関係の良くない親戚の人のことですが、一人は主イエスを信じ、もう一人はまだ主イエスを信じていない人でした。話の結論として、その未信者の方は急に次のように言いました。「今までの事を忘れて、今から親しく交わりましょうよ！」彼は確かに、まだ未信者であり、まことの救い主である主イエスをまだ体験的に知りませんが、こういう風に話す事によって、悪い過去の事はもう過ぎ去り忘れ去っています。問題は今からの事です。「救い合いましょう！」と言ったのです。

私達はこれを聞いて、本当に嬉しかったのです！ 何故ならば、主なる神の申し出と同じだからです。即ち、「さあ！ 来たれ！ 論じあおう！」と主は仰せられる。たとい、あなた方の罪が、緋のように赤くても、雪のように白くなる！」（イザヤ1・18）

天と地を無から創造されたお方である、唯一のまことの神は、イエス・キリストの代わりに死

のおかげで、全ての罪と過ちの赦しを提供しておられます。あらゆる過ち、又、我ままを赦す事が出来るだけではなく、赦したくて、赦したくて、しようがないのです。即ち、「今までの事を忘れて、親しく交わりましょうよ！」と主イエスは呼びかけておられるのです。

人間は、「赦し合いましょう！」という気持ちを持つことが出来るのです。しかし、なかなか忘れません。何かあれば思いだすのです。しかし、唯一の生けるまことの神は、赦して下さるだけではなく、忘れて下さるのです。

イザヤという預言者は、BC740年～680年に生きていて、主のしもべとしてまことの喜びのおとずれを伝えました。

「わたし、このわたしは、わたし自身の為に、あなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」「わたしはあなたの背きの罪を、雲のように、あなたの罪を、かすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ！わたしはあなたを贖ったからだ！」（イザヤ43・25、44・22）

広島原子爆弾を経験した人々は、この悲劇を忘れられません。愛するランメル幸も、広島悲劇を経験なさったことを確かに忘れませんが、しかし、主イエスに出会って前向きに生活するようになりました。

イエス・キリストの弟子であるペテロと同じように言えるようになったのです。

「私の主イエス・キリストの父なる神が、ほめたたえられますように！神は、ご自分の大きな憐みのゆえに、イエス・キリストが死者の中から甦られたことよって、私を新しく生まれさせて、



ベック兄とランメル姉

生ける望みを持つようにして下さいました。」(1ペテロ1・3)

あらゆる人間にとって、どうしても必要な事は

1. どういう状況におかれても、変わらない喜びを持つ事
2. 心配からの解放されて、まことの平安を得る事
3. 生ける希望を持って、前向きな生活をする事、です。

この「忘れないでヒロシマ」のご本をお読みくださったおひとりおひとりが、真の神である主イエスに出会われ、喜びと平安を得て前向きな生活をされることを心から願っています。

2013年7月17日

ゴットホルド・ベック  
(ドイツ出身日本在住60年)

まえがき	ゴットホルド・ベック	2
第一部	父を恋うる手紙	9
	大好きなお父さん	10
	二人のお母さん	12
	地球が止まった日	15
	黒い雨	19
	父帰る	21
	高須の公園	26
	光ちゃんはね	29
	戦争が終わって	34
	私の家族	38
第二部	萩、広島、東京	49
	狸が入る蔵	50
	除霊	53
	萩の思い出を胸に、故郷 広島へ	56
	銀行員	58
	上京——お見合いと失恋	61
	電車の中で	70

もくじ

第三部	チャックとの出会い	75
	心臓に毛が生えて	71
	素足で私の心に入ってきた人	76
	寝台車安芸号	81
	デート	85
	白いテープ	89
第四部	カナダへ	93
	送られてきた小切手	94
	森と湖の国	98
	カナダ人の家庭にホームステイ	105
	ジャック・アンド・ベティの家	106
	モニークの家	112
	ビッキーとテニスの家	115
	ジムとダイの家	117
	サイプレス・パーク・ティールーム	120
	今日は指輪を買う日	126
	二人を阻む人種差別	128
	山姫丸に乗り移れ	133



忘れないで、ヒロシマ



第一部  
父を恋うる手紙



幸せな子ども時代。左端が幸。(1941年)



## 大好きなお父さん

お父さん。

お父さんは、広島町の町がアメリカの原子爆弾で火の海となった時、重傷の身で崩壊した町を通り抜け、川を渡って夜遅く帰ってきましたね。

それからは高須の家の客間にふせって、苦しんでいましたね。私は八歳でしたが、お父さんと遊びたくて、そばに行つて声をかけると、苦しそうな顔が笑顔に変わり、うなずいてくれました。でも声は出ませんでしたね。

お父さん。

お父さんは生活力があって、頼りがいのある人でした。お父さんが晩酌をしながら食事を楽しんでる時、私はいつもまつわりついて、胡坐をかいている膝の上に乗ったり、背中におぶさったり、お酒のつまみを食べさせてもらったりしました。お父さんの声、お酒の匂い、毛の生えた腕や足を今でも覚えています。

お父さん。

お父さんを思う時、原子爆弾が炸裂した瞬間、大勢の広島市民の命が、一瞬のうちに消えてしまった一九四五年の夏の惨事の悪夢がよみがえってきます。そして、安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから”と人々が誓った言葉もむなしく、二〇一一年三月十一日、東日本大震災によって、福島原発事故が発生、もう人間の力ではどうすることもできない大災害となりました。想像に絶する恐ろしいことです。原爆と原発との違いはありませんが、原子力で起こった災害という点では同じです。この問題の解決は、どこへ求めればよいのでしょうか。

私はお父さんを亡くしてから、お母さんと弟の雄太と苦勞を重ね、がんばって生きてきました。カナダ人チャックと結婚してからは、カナダと日本の文化の狭間で葛藤の多い日々でした。カナダ国籍を取得した式典の時は、カナダ国歌を合唱しながら涙が止まりませんでした。でもね、お父さん、私が七十六歳まで生かされている奇跡を思うと、すべては偶然ではなく、神様のお恵みによつてなされたことと確信できます。私が養女に行つたこと、原爆にない、お父さんを失つたこと、山口県萩でお母さんと雄太と暮らした頃の苦勞、カナダ人の夫と子どもとの異国での暮らし、そして、仏教徒からキリスト信者になつたこと…。これら

の経験を通して、今ここに在ることの喜びが湧き上がってくるのです。

そんな時、原爆体験が原点となった私の人生を振り返って、胸の思いをお父さんに語りたくなりました。お父さん、どうぞ聞いてください。

『さあ 神と和らぎ平和を得よ。そうすればあなたに幸いが来よう。』

ヨブ記 二十二章二十一節

『わたしたちの国籍は天にあります。』

ピリピ 三章二十節



## 二人のお母さん

父一雄の実家は広島の造り酒屋でした。父は長男でしたが分家して広島市に住居を構え、

電気会社のサラリーマンをしていました。祖母のチズと一緒に住み、離れの部屋に仏壇を置いて念仏を唱えていました。父はヨシコと結婚、仲むつまじい夫婦でした。二人ともハイカラで、しゃれた洋服を着てイス式の生活を送り、夕食後は蓄音機をかけて音楽を楽しんでいました。しかし、母のヨシコは体が弱くて結核でした。物心がついた私は母に甘えたかったのですが、結核が進行して離れの部屋に隔離され、時々しか会えません。そして私が五歳の時、母は三十九歳で生涯を閉じました。一緒に過ごした思い出はほとんどなく、その分父に  
かわいがられたのでしよう。

翌昭和十八年、父は二度目の妻をめました。私の新しい母です。みさをといて、山口県、萩の造り酒屋のお嬢さんでした。結婚式はその実家で行われ、父は私を連れていって  
くれました。私は、

「新しいお母さんが来る！」

とはしゃいでいました。式当日、母は鏡の前で花嫁衣裳を着て、お化粧をしていました。『きれいな人だなあ』と思い、恥ずかしいような、でも好奇心いっぱい  
の気持ちで、鏡越しにのぞくと、

「ああ、幸っちゃんね。私があなただのお母さんよ。かわいがってあげるわね」

と声をかけてくれました。とてもうれしかったです。

私は二人の新婚旅行について行ったのです。夜中に目が覚めた時、真つ暗な旅館の部屋に一人で寝かされていて、こわくて大泣きしたのを覚えています。

「一雄さんは、幸っちゃんを新婚旅行に連れて行った」と後々まで一族の語り草になります。

昭和二〇年三月、弟（進藤雄太）が生まれました。戦争の激しい最中でしたから、食糧が乏しく、我慢、我慢、お国のためにと人々は貴金属や貴重品を供出して質素な生活に耐えていました。それでも、父がどこから食糧を調達してきました。母は近所に匂いにするのをはばかりながら、おいしい料理を作ってくれま



後左から、愛子、恵子。前左から幸、祖母チズ、光。（1942年）

した。

その頃、父の妹の愛子が、夫の勇が出征したので、三歳の息子の光（ひかり）を連れて高須の家に来ました。祖母のチズと、愛子叔母さんと光とで家族は七人となりました。梅雨が終わり、セミが鳴く暑い夏がきました。



## 地球が止まった日

昭和二〇年（一九四五）年八月六日、雲ひとつない青空が広がり、朝から暑い日でした。広島市古江高須町に住んでいた私の家族は、平凡ながらつつがなく暮していました。私は八歳、弟の雄太は五カ月でした。

午前八時十五分、アメリカは広島市に世界初の原子爆弾を投下しました。B29爆撃機（工

ノラ・ゲイ）が広島市上空に飛来して、リトルボーイと呼ばれる原子爆弾を落としたのです。人口約四六万人の広島市民のうち九割が被災し、一瞬にして二五万人の生命が奪われました。そして、草、木、動物、建物、人、ありとあらゆるものが爆破されました。ピカッと光った光線は三〇万度の熱線で広島市の街のすべてを焼き尽くしました。

原爆落下の時、地面からもくもくとドーナツの輪のような雲が、高く、高く空に向かってのぼり、そこできのこのように広がっていきます。それはきのこ雲とも呼ばれました。

私はその時、古田国民学校の校庭で遊んでいました。校舎は爆心地から約三・五キロ離れた住宅地の小高い丘の上にあります。校庭には二宮金次郎が薪を背負って読書をしている銅像が立っており、そばには大きな木が茂っていました。ピカドンが落ちた時に私が無傷だったのは、きつとその木陰にいたからでしょう。ピカッと辺りが光ると同時に、舞い上がった砂塵で何も見えなくなりました。子どもたちは、ワーワー叫びながら教室の中に駆け込みました。

それから高学年の班長さんに連れられて、グループで山道を通って家に帰りました。帰路、晴れ渡った青空なのに、急に黒い雨が降り始め、私は友達の藤田さんと手をつないで走っているうちにグループから離れてしまいました。どこかの防空壕に入って雨宿りをし、雨が小

降りになったので二人で山を下りました。

私は、その時足をすべらせて畑の隅にあった肥壺に片足がはまってしまいました。その頃、畑の肥料は人間の糞尿をためて使っていたのです。臭い足を引きずりながら泣き泣き歩いてると、通りかかったおじいさんに「泣くな、がんばれ、日本の子だ」と言われました。私は怖さよりも、足が臭くて悲しかったのです。

他の子どもたちがとつくに帰ったのに、藤田さんと私はまだ帰ってきません。そこで、行方不明になったと、町内会の人々は大騒ぎで私たちを探し回りました。やっと帰り着いたとき、私の着ていた白いブラウスは、黒い雨の斑点が布地にしみついていました。洗濯をしても落ちません。私のお気に入りのブラウスでした。

私の家は焼けませんでしたが、爆風で床が跳ね上がり、ガラス戸は壊れ、屋根の瓦も吹っ飛びました。しかし、庭に井戸とポンプがあったので水に困ることはなく、傾いた家の中で雨風をしのぐことができました。その夜、庭で祖母に行水をさせてもらっていると、東の空が黄色に染まっているのが見えます。祖母は、「あれはね、広島街が燃えているんじゃない。恐ろしいことよ。大きな爆弾が落ちたそうなの。いびせえのー（こわいの意味）」と話してくれました。

日が暮れても焼け出された被災者は列をなして西へ西へと歩いていきます。人々の服は焼けてぼろぼろで、体も焼けただれておぼけのようです。私は外に出てはいけなと言われ、いとこの光ちゃんと家の中でじつとしていました。母は、父と愛子叔母さんが帰らないので、隣組長さんの所で手がかりを探していました。近所の人々が右往左往して、行方不明の家族の安否を気遣っています。

不気味な空気が夜の闇と共に広がっていきます。隣の小父さんが帰ってきた時には、お父さんも愛子叔母さんも、まもなく帰ってくるだろうと期待していました。時々、誰かが裏木戸から出たり入ったりして、母と話しています。東のはるか彼方には、燃え狂う広島街の炎がますます赤く天に広がっていきます。離れの部屋で祖母が一人、仏様に手を合わせて念仏を唱えています。線香の匂いが漂う中で、光ちゃんは祖母の念仏を子守唄にして、ゴロンと寝てしまいました。



## 黒い雨

我が家のポンプは近所の家庭の潤いの水となりました。バケツを持って「進藤さん、水をください」と隣組の主婦がかわるがわるやって来ます。そのたびに広島に落ちた新型爆弾の話でもちきりでした。

恐怖のあまり多くの人の髪の毛は逆立ったまま、帽子をかぶっていた人はそだけ髪が残っていたり、建物の下敷きになって動けない人、その人の足を切って消防隊が助けた話、死んでいる母親の胸にすがって泣きながら乳を求めている幼児、その反対に、冷たくなった赤ん坊を抱いて逃げまどっている母親、男だか女だかわからない真っ黒になった人、幽霊のように両手を前にたらしめてあてもなく歩いている人、すべてが想像を絶する光景でした。

母はまだ帰ってこない父と、愛子叔母さんのことを心配して、少しの情報も漏らさないように人々の話を聞いていました。父と叔母さんの安否を尋ねても答えはありません。街は焼け野原、建物も道も跡形もなく死体が折り重なっている、川にも水槽にも水を求めて飛び込んだ人の死体でいっぱいだ、水の都、六つの川はほとんどが破壊されて渡ることができない、

広島は全滅した、捜しにいつても無駄だ……。そしてほとんどの人が

「自分の近くに爆弾が落ちた」と言っていました。

母は避難してくる被災者に、父や叔母のいた場所の様子を知っている人はいないかと声をかけていましたが、絶望の答えしかありません。その人たちは、全身火傷を負い、皮膚がだらりとたれ下がっています。そして水を求めています。水を飲ませると死んでしまうから飲ませてはいけない、と言われていましたが、母は飲ませざるを得なかったそうです。

『原爆の図』で知られている画家、丸木俊の、『ひろしまのピカ』と題する子ども向けの本があります。その中に黒い雨が降っている中を逃げまどっている負傷者の上に、七色の虹がかかっている絵があります。私は八月六日のこの虹を見てはいませんが、これは神がどんな時にも、希望を持つようにと示して下さっている約束の虹ではないかと思うのです。

『わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。』

創世記 九章十三節



## 父帰る

爆心地の近くで働いていた父は、その夜、遅くに帰宅。

「みんな元気かい」

とひと声かけて、玄関先にぱたりと倒れ、動けなくなりました。母は十畳の部屋に散らばっているガラスの破片を片付けて、しっかりした床を選び、その上に布団を敷きました。そして玄関から父を運んで寝かせました。母は身長一五〇センチ足らずの小柄な女性です。後で、「お父さんは重かった。あの時はきつと、馬鹿力が出たのでしょうか。よく一人で動かせたと  
思っわ」

と言っていました。

父の体は外傷が少なかったので一見元氣そうに見えました。だが、放射能に犯された体は日に日に衰えていきました。寝たきりで、下痢、吐き気、体の痛みで、あえぎ苦しみ続けました。体の外から口の中、内臓まで放射能に犯されて、食物はのどを通らず、水と重湯を飲んで生き延びていました。

母はお百姓さんから荷車を借りて、荷台にごさを敷き、父を乗せて避難所となっていた古田国民学校に数日通いました。そこには負傷者がゴロゴロと床の上に寝転んでいました。そして派遣された医師と看護婦が彼らの手当てをしていました。母は父に一度でも良いから医師の診察を受けさせたいと思い、炎天下の中、荷車を引いて幾度か学校に通いましたが、いつ順番が回ってくるのかわかりません。日を重ねるにしたがって負傷者が増えるので、診察してもらおうのをあきらめてしまいました。

そんな状態の中でも、父は家族に爆心地の様子を語ってくれました。

原爆が落とされた時、父は爆心地に近い電力会社の机に向かっています。一瞬にして気を失い、気がついたときは瓦礫に埋まって身動きできない状態でした。幸い両手が自由に動かされたので、回りの木切れ、壁土、ガラスの破片、セメントのかげらなどを取り除きました。しかし、父の体は大きな柱と板の間に挟まれて抜け出ることが出来ません。同僚はどうして

いるかと数名の名前を呼んでみましたが返事はありません。そのうちに、遠くの方で火の手が上がりました。

このまま焼け死ぬのを待つしかないのかと、あたりを見渡すと曲がったのこぎりが、板にかかったまま少し向こうに落ちています。そばにあった棒きれを使って何とかそののこぎりをたぐり寄せ、やつとこのことで柱を切り始めました。火の手が近づいて熱風が伝わってきます。

「あと五分遅かったら命はなかった」

と父は語っていました。街は見渡す限り破壊され、その中を負傷者が逃げ回っています。ところどころ火が燃えているので、なるべく火のない方へ、川の方へと逃げていると、ぱっと目の前に火柱が立ち、メラメラと炎が出ます。人々は、こつちがいい、いや、あつちがいいと逃げまどい、まさに阿鼻叫喚の光景だったそうです。

父が歩いていると、

「助けてください。水をください」

「私も連れて行って」

「どうかこの子をお願いします」

と、瓦礫の下から声が聞こえます。父はその人たちを助けてあげたくても、自分一人歩くのが精一杯でしたから、

「もうちよっと我慢しなさい。救助隊に頼んであげるからね」

「ごめんなさいね、がんばってください」

と慰めながら、負傷者の手を振り切って歩くしかありません。

突然、一人の男が立ち上がり、天に向かって両手を挙げ、

「天皇陛下、万歳！」

と叫んでばたんと倒れました。

途中で川に入って体を冷やしましたが、水の中には人間や動物の死体が浮いています。行き交う人は火傷で皮膚がダラリとむけた人、体がふくれあがつて男だか女だかわからない人、手や足を失った人、血だらけの人、死んだ赤子を抱いている母親、気が狂った人、名前を呼びながら一人一人倒れている人に声をかけている人……。

嗚咽と悲鳴が聞こえる中、後ろ髪を引かれる思いで歩き続けました。行けども行けども道路も道も建物も崩壊し、地面は足の踏み場もありません。重なり合った死体を踏まないように歩こうとしても、次の足はもう死体の上に降りています。ヒロシマの街は見渡す限りの廢

墟。父は何度も気が遠くなりました。どこか避難できる場所か防空壕を探そうにも、あまりの街の変わり様にあきらめて、ひたすら高須の家を目指して歩き続けたと言います。

弱りきった体で、か細い声で、父の話は続きます。家族が父のそばに付き添い、うちわで風を送っています。額にじむ汗を井戸水にタオルをひたしてふき取っています。照りつける太陽の下で、ミンミンゼミ、アブラゼミが夏の暑さをあおるように鳴いています。父は顔をこわばらせたりうなったりして苦しそうです。

「あれは地獄だった。夢じゃない。この世で実際に起こったことだ。わしはこうして我が家にたどりつき、家族に会えて幸せだ。街には力尽きて行き倒れた人たちの死体が足の踏み場もないほどごろがっているんだ。人間だけでなく、黒焦げになった動物の死体もいっぱいあった……」

父の体は外傷が少なかったので、一見元気になりそうでした。私は「明日はお父さんは元気になって、一緒にご飯が食べられるだろう」と毎日、父の回復を待っていました。けれども放射能に犯された父は、下痢、嘔吐を繰り返し、血を吐いて苦しみ続けました。

一九四五年八月十五日、天皇の玉音放送と共に、日本は戦争に負け、終戦となりました。父はこの放送を聞いて、

「これから世の中は平和になるぞ。よかった、本当によかった。裏の築山の下を掘ってごらん。家族が一生困らないで食べていけるお金と株券が金庫に入っているよ。他にも砂糖や塩、穀物が埋めてあるからね」

と言つて母を安心させました。しかし、翌日八月十六日、父は四六歳で帰らぬ人になりました。

『私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。

途方にくれていますが、行きづまることはありません。』

コリント 第二 四章七節



## 高須の公園

父が亡くなってお葬式を済ませた後、父の遺体は荷車に乗せられて近くの高須公園に連れていかれました。そこでは、来る日も来る日も、大勢の死体を焼く作業が繰り返されています。公園にはいくつも穴が掘ってあり、隅には遺体を焼く薪が一杯積んであります。風向きによって、悪臭が家まで漂って来ます。その穴の一つに薪を組んで布団を敷き、遺体を置くのです。父は白い布をかぶせられて横たわっていました。母と祖母が、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、と合掌しています。

ガソリンがまかれ、火が燃えあがりました。私は、

「お父ちゃんを焼いちゃだめ、焼かないでー！」

と泣き叫び、母や祖母に抱きかかえられました。その母も祖母も号泣しています。私が、

「お父ちゃん」

と力の限り声をふり絞り叫んでいるのに、穴の中から火は勢いよく燃え上がっていきます。五ヶ月の弟は母の背中でごっすり眠っています。いとこの光ちゃんは大きな目で前を見つめたまま、直立不動です。私は首にタオルを巻いて汗をふきながら、無表情で作業をしている男の人たちをうらめしく思いました。

一九七九年の夏、里帰りをした時、娘のりサとこの高須公園へ行きました。公園には白い砂が敷き詰めてあり、まわりの木々が憩いの陰を作っています。母親に連れられた元気な幼な子が遊びに来ています。けんかをする子、泣いている子、笑っている子、平和な時間が流れています。なんと恵まれた子ども達でしょう。原爆の悲惨な痕跡は跡形もなく、すべてが忘れさられ、今は、子どももの集う楽しい場所となっています。父の孫娘のリサも、栗色の髪をなびかせて無邪気に遊んでいます。亡き父の思い出が私の胸をよこぎります。大好きだった父はこの公園で焼かれ、親戚の人も次々と死んでいきました。一家全滅の親戚もいます。一緒に暮らしていたいとこの光



高須公園の原爆慰霊碑（2011年撮影）

ちゃんも、両親を戦争で亡くしました。光ちゃんとはこの公園でよく遊んだのです。

『平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。』

マタイ伝 五章九節



## 光ちゃんはね

光ちゃんのお父さんは戦地に行っていましたので、お母さんの実家、つまり私の家に里帰りをしていました。戦争がたけなわの頃でしたから、家庭の主婦でも勤労奉仕といって、お国のために軍事工場などに手伝いに行っていました。

原爆が投下された八月六日、母は五ヶ月の乳飲み子を抱えて町内会から広島島の街に勤労奉仕に行くことになっていました。光ちゃんのお母さんの愛子叔母さんは母に、

「ねえさん、赤ん坊を抱えて行くのは大変でしょ。お乳も飲ませなくてはいけないから、私が代わりに行きましょう。そのかわり光をお願いします」

と言って、母の代わりに行ったのです。そして、あの運命に出遭ったのでした。

母は気違いのようになって、病気の夫と五ヶ月の赤ん坊を姑に頼んで、火がくすぶる中を愛子叔母さんを捜しました。シャベルを持って、瓦礫の下や灰の中まで手がかりを求めて歩き続けました。

「愛子さーん、愛子さーん！」

と呼びながら涙が止まらず、死体が重なった傍に座り込み、また力を振り絞って歩きました。夏の太陽は、人間や動物の死体の上を照りつけて、それらにうじ虫がわいて、悪臭に満ちていました。どこからかカラスがやってきて死体に止まり、焼け残りの肉をつついていきます。生き残った人から、愛子さんのグループは東へ逃げたと聞いて、母は東を探しましたが愛子叔母さんは見つかりません。救出隊が黙々と働いているばかりです。母は後々まで、その光景の悪夢に悩まされました。

母は、ある日は負傷した夫を医者に連れて行き、ある日は愛子叔母さんを探し、家に帰ると乳飲み子にお乳を飲ませて家事をこなして、寝る暇もなく体を動かしました。母の努力もむなしく、愛子叔母さんは遺骨も遺品も見つかりませんでした。

『人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。』

ヨハネ 十五章 十三節

原爆でお母さんを失った光ちゃん、お父さんも戦地に行つたまま帰らず、一人ぼっちとなりました。しばらく我が家で暮らしていましたが、愛子叔母さんの姉である恵子叔母さんの家に養子としてもらわれていきました。恵子叔母さんの家は女の子四人で跡継ぎがなかったからです。

母は、親戚の集まりで何度も話し合い、特に恵子叔母さんに、

「私の身代わりとなって亡くなった愛子さんの一人息子は何としてでも、自分が育てたい」と、お願いしましたが、結果は恵子叔母さんの夫も健在なので、進藤家よりも光ちゃんは恵子叔母さんに引き取ってもらおうのが良いと判断されました。

その後、恵子叔母さんの夫がなくなり、経済的に苦しくなったので、母は光ちゃんのことを片時も忘れず、死ぬまで気にかけていました。私にとつても、彼はもう一人の弟で、光ちゃんも私をお姉さんとしてくれます。

母を原爆で失い、父を戦争で失い、みなし児となった光ちゃん。彼は当時三歳半でしたから原爆の記憶はなく、お父さんお母さんの顔すら覚えていません。自分の悲劇を語ることはできませんし、私がその話をするのを嫌がります。

しかし、光ちゃんはこうした不運を、新しい家族の中で幸運に変えて成長していききました。子どもの時からもの静かで落着いた性格は今も変わりません。頭がよくて親切で、ある製薬会社に定年まで勤めました。奥さんは学校の先生です。三人の子どもに恵まれて平和な家庭を築いています。

彼は自分の人生を振り返った時、積極的に平和運動に参加すべきだったかと悩んで私に話したことがあります。でも自分にはできなかつたと言います。敗戦後、復興した日本の社会

で、よい仕事につき、家族と平穏な生活、平凡だが安定した暮らしのために精一杯生きてきたと語っています。光ちゃんは、平和のために尽力する人々を、心から尊敬すると言っています。

心に深い傷を持っている人は、その傷を表に出すことをためらいます。傷が深ければ深いほど触れられたくないのです。被爆した人々はそれぞれの傷を胸に秘めて、静かに人知れず生きています。彼らが被爆体験を語ることは、とても勇気のいることです。

『光は、正しい者のために、種のように蒔かれている。』

喜びは、心の直ぐな人のために。』

詩篇 九十七章十一節



## 戦争が終わって

父の残した物資はずいぶん役立ちましたが、お金は新円切り替えになって紙くず同然になりました。働いたことのない母は、祖母と二人の子どもを抱え、戦争未亡人としての厳しい生活を強いられました。

原爆で焼け野原となった広島でしたが、私たちの家は斜めに傾いただけで何とか雨風をしのごうことができました。問題は食料です。当時はほとんどの物資が配給でしたから、並んで物資の支給を受けていました。しかし、配給だけでは食料が足らず、市民はひもじい思いをしていました。

母は山の上のお百姓さんの家を歩いて、できそこないのかぼちゃ、くず芋、ネズミがかじった跡のあるじゃがいも、しなびた野菜の葉っぱなどを分けてもらいました。裏庭は畑にしていたので、季節の野菜が採れてとても助かりました。そこにはさつま芋が植えてあります。さつま芋は枝と葉が大きくなると、ツルになって土の上をはびこって勢いよく伸びていきます。

私はそのさつま芋の葉を間引いて葉と莖に分け、莖は半分に割って筋をとって食べやすくします。母はそれを茹でたり煮たりしておかずにしました。さつま芋はお芋だけでなく、莖も葉も食べられるのです。きつと仕方なく食べたのでしよう、味は覚えていません。

子どもたちの遊びは、友達と山に行ったり、海に行ったり、野原でかけっこをしたり、その上何か食べ物の足しになるものを採ることでした。

夏の楽しみは、学校から帰るとバケツとシャベルを持って友達と潮干狩りに行くことです。歩いて一時間ぐらいで海に着きます。引き潮を見計らってせつせとシャベルで砂を掘り、アサリを集めました。塩が満ちてくると瞬く間に周りに水が寄ってくるので、走るようにして岸辺に引き上げました。バケツいっぱいのアサリを母に渡すと、とても喜ばれました。

秋になるとバツタ捕りに行きました。スイスイと麦畑や野原の草の中を飛んでいるイナゴという緑色のバツタです。草に止まっているバツタにそおと近づいて、パツと両手を合わせて捕るのです。バツタは素速いので、捕えるのは至難の業でした。捕ったバツタは佃煮にして食べました。目玉、足、ヒゲ、丸ごと口に入れると、カリカリと音を立ててとてもおいしかったのです。山に行つて松ぼっくりを拾ったり、木の枝を集めて、それらを背中に背負つて細いあぜ道を帰つたものです。お風呂を焚いたり、かまどにくべて燃料にするため

です。

二百十日の台風のアとは近くのお宮の境内に行つて、落ち葉に混じつて落ちてゐる銀杏の実を拾います。銀杏の皮は腐つたような臭いがして、手に汁がつくとかぶれて赤く腫れ上がります。家の前には小川があり、雨上がりの後はどじょうや、ふなが流れてきます。網を持つて魚を捕つたり、砂で堤防のようないけすを作つて魚を追い込んだりしました。

雨の日はままごとをして遊びました。ままごとの家族構成はお父さん、お母さん、赤ちゃん、被爆した病人などです。男の子はいとこの光ちゃんしかいないので、光ちゃんはいつもお父さん役でした。欠けたお皿やお茶碗を使つて、庭の雑草、野花、木の実がご飯やおかずになります。木の枝は焼き魚でした。

いつもひもじい思いをしていた子ども達は、ままごとではおかわりをいっぱいしておなかを満たしました。また、お酒を飲む真似もよくしました。お酒が原爆症に効くという話を聞いたからです。近所に大酒飲みのおじさんがいました。彼は被爆して髪の毛が全部抜けて丸坊主になり、寝たり起きたりぐらぐらしていました。これは原爆症の一つです。それでもおじさんは、毎日お酒を飲んでいました。彼はその後元氣になりました。お酒の効果があつたのでしょうか。

原爆症状は、そのほかにも下痢が続いたり、体中に赤い斑点ができたり、肌は紫がかり、歯茎から出血します。私も赤い斑点の湿疹が体中にできてかゆくて大変でした。かくと化膿するので、お母さんは手袋を作ってくれて寝る前にはそれをはめて寝ていました。この湿疹は大豆がよくないということで、私だけ特別に白のお米のご飯を食べさせてもらいました。家族はお米の代わりに脱脂大豆と違って、大豆の絞りがすを食べるのです。おままごこの時、子どもたちはきやつきやつとはしやぎながら、吹き出物が治り始めてできたかさぶたを、私の体からむしりとりて食べるまねをします。このかさぶたは脱脂大豆とよく似ていたからです。

「イタタタタ、そこはまだ乾いてない！」  
などと笑ったのです。

『私は知っている。私を贖う方（主イエス様）は生きておられ、  
後の日に、ちりの上に立たれることを。』

『私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。』

この方を私は自分自身で見る。』

ヨブ記 十九章二十五―二十七節



## 私の家族

ここで私の進藤家族を紹介しておきましょう。

父、一雄は電力会社に勤めるサラリーマンでした。家族を愛するマイホームパパで、大変家庭的な人でした。仕事から帰ると薪割りから植木の手入れ、芝刈りをして、近所の人たちから「良い旦那さんを持つてお幸せね」と母は羨ましがられていたそうです。

子煩悩な父は八歳下の弟が生まれたのを大変喜んでいましたが、私は父に目に入れても痛

くないほどかわいがられ、「幸」という名前どおり幸せな子ども時代を送っていました。小学校三年生頃から掛け算を習いましたが、私は算数が大嫌いで、宿題を怠けては寝る前になってぐずりながらやり始めると、必ず父が手助けをしてくれました。今も数字に弱く、計算が下手で、数字のケタを付け間違えたり、読み方を間違えたりしてまごついています。これは父の過保護のせいでしょうか。

母、みさをは優しい夫のもと、よき妻、よき嫁、優しい母として、七人家族のために、白い割烹着をつけて一日中こま鼠のように働いていました。食糧難なので家族の食事には工夫をこらし、繕い物、布団の縫い替え、着物の洗い張り、障子の貼り替え、そして家事の合間には四季折々に床の間の掛け軸、置物、活け花などを取り替えていました。私は時々母を手伝っていましたので、子ども心に、主婦とは忙しく働くのが当然と思っていました。

身代わりになった義妹を思い、母はどんな気持ちで生きたのでしょうか。母は信心深い人で、朝夕仏様に手を合わせるのを日課としていました。母には、愛する夫の死、そして帰らない義妹を探し歩いた時の阿鼻叫喚の光景が焼き付いて、死ぬまで離れなかったのです。

三十歳で未亡人となり、敗戦の真っ只中を子ども二人を育ててゆくのは、働いたことのない母にとっては至難の業でした。食料を求めて農家を歩き回り、しばらく\*タケノコ生活を

していましたが、物資が底をつく、広い家に大学生を四人下宿させて生計を立てました。健康が自慢でしたが、無理がたたり、原爆症状がでて、寝たり起きたりしながら、それでも一家の大黒柱で祖母と子ども二人を養なってくれました。

父方の祖母、チズは浄土真宗の信仰が厚く、朝に夕に仏壇の前でお経を読んだり、南無阿彌陀仏を唱えていました。私は離れにある祖母の部屋に行つて、お線香のにおいがする仏様のおさがりの果物やお菓子をいただくのが何よりの楽しみでした。祖母はよく極楽、地獄の話を私にしていました。極楽に行くときは、天女様が雲に乗つてお迎えに来てくださると聞いていました。

父の死後間もないある日の夕方のことです。

「幸ちゃん、幸ちゃん」

と祖母が庭で呼んでいます。何かに夢中になっていた私は、聞こえないふりをしました。行水させられる時間だったからです。

しばらくして庭に出ると、祖母は、

「さつきたくさんの天女様が空を通つて行かれたのよ。紅い雲に乗つて極楽に行かれるのが見えたの。きれいなきれいな着物を着た行列だったよ」

と言うのです。私は、しまったと思うと同時に、その時父が一緒だったとの思いがわいて来ました。私は、呼ばれた時すぐに行かなかったことを後悔しました。その祖母は、お盆に近い昭和二十三年八月十一日に、まるで浄土に迎えられるように七十五歳で静かに世を去りました。

弟、雄太は昭和二〇年三月二〇日、終戦の年に生まれました。その日は、近所の人たちが手伝いに来て、お湯を沸かしていると産婆さんがきました。

私は赤ちゃんが生まれるので嬉しくて、家の中でスキップして飛び跳ねていると、「静かに！」と叱られ、母が寝ている部屋に行こうとすると、

「こどもはあっちに行つてなさい」

と剣もほろろに四畳半の部屋に押しやられました。それでもわくわくする気持ちを抑えて待っていると、突然赤ちゃんの産声が聞こえ、「男の子、男の子が生まれた！」と急に大人たちが大喜びしたのをおぼえています。

弟は母乳を飲んで、すくすくと育ち、三歳頃からはほっぺたがはちきれそうに膨らんでおぶたちゃんのようにになりました。腕白坊主で一日中遊びまわり、服を泥んこにするので、洗濯が大変でした。

小学校入学式のとき母が病気でしたから、私が親代わりに出席しました。雄太は何時も私のそばにくっついていて、どこに行くにも一緒に邪魔になる存在でした。後日彼の話では、母の命令でお姉さんが怪しいお出かけの時は、必ず僕が付け馬について行かされたと笑うのです。

お正月の親戚訪問に始まり、映画鑑賞、遠足のような日帰りの秋芳洞見物、下関に転勤された高校時代の男の先生に会いに行った時などです。一九五五年の頃は映画や観光すら怪しい行動とみなされたようですが、私はそんなこととはつゆ知らず、休みになると制服を脱いで、数少ない服の中から、ありったけのおしゃれをして出かけたのです。弟は私の影武者として、立派に役目をはたしてくれました。

雄太は光ちゃんと同じく、父を全く知らない子どもです。私が父から受けたあふれるばかりの愛をわけてあげることができたら……、と今でも思います。弟と私はよく喧嘩をしました。そんな時、仲裁に入る母は、私をかばって、実子の雄太を叱っています。それをいいことにして、私は自分のエゴを通して勝ちほこる高慢な姉でした。「ごめんね、雄ちゃん、あなたが一番愛されるべきお母さんの愛情を、私が横取りして……。あなたの上のにのさばって……。恐ろしいお姉さんだったわね。でもね、良心のかけらもすこしはあったのよ。銀行にお

勤めを始めて家計を助けながら、あなたが大学に行くための貯金を始めたの。わずかの金額だけど、毎月、毎月銀行を退職するまで続けて、たまったお金はお母さんに渡したの。私が大学に行かなかったから、あなたには行ってほしかったの。あなたは大学で電気技師の勉強をして、お母さん、安心したよね」

雄太が生まれるまで、私はひとりっ子として甘やかされて育ちました。父の死の二年後には祖母が亡くなり、母と弟と私の三人の暮らしが続きました。私が小学校六年生の頃から母は病気がちとなり、床に伏せるようになりました。母の実家山口県萩から祖母が手伝いに来てくれましたが、その祖母はある日、脳溢血で倒れてしまったのです。私は医者を呼びに行き、近所で電話を借りて萩の実家に知らせるなど、一人で取りしきりました。

一九四九年当時、家庭に電話は皆無でした。お風呂もご飯も新聞紙をまるめて細い木切れをその上に置き、マッチで火をつけて薪をくべて炊くのです。ちょうどキャンプファイアーの火をおこすのと同じ要領です。

私はマッチをつけるのが恐くて、マッチを擦って火がつくとすぐかまどの中に放り投げるので、途中で火が消えてしまい、慣れるまで何度もマッチを無駄にしました。おかずや魚などは七輪に炭か豆炭をおこして作るのです。

洗濯はお風呂の残り湯をたらいに汲んで、汚れ物に石鹼をつけて洗濯板でごしごしと洗います。それを冷たい水ですすいで竹ざおに干しますが、雨の日は軒下に移動させたりで、身長一四〇センチそこそこの子どもには大変でした。毎日の布団の上げ下ろし、天気の良い日は布団干し、家や庭の掃除、廊下の拭き掃除などと、すべて手と足を使つて行います。

学校から帰るとかばんを置いて働き続けました。宿題や予習復習は家事が終わつてから始めるのです。冬になると私の手はあかぎれだらけになって血がにじみ、しわの間には黒い炭のあとがのこっています。爪の検査のとき、児玉先生は私の手の荒れ様を見て驚き、

「どうしたの、この手」

「母が病気で、私が家事をしています」

先生はしばらく沈黙され、何と言葉をかけたらよいのか戸惑われたようです。児玉先生の目には、うつすらと涙がにじんでいました。

数日後 児玉先生は手に塗る『桃の花』という、ピンクのクリームをくださいました。

その頃、叔母の好村ヒサコが時々訪ねてきました。叔母の家は私が電車通学をしていた広島女学院中学校の近くにあり、私はたまに学校の帰りに立ち寄つて従妹の俊ちゃんとおやつ

を食べ、ひと休みして家に帰っていました。ヒサコ叔母さんはずいぶん私に親切で、俊ちゃんとお揃いの洋服を作ってくれたり、わざわざ写真屋に行つて従姉妹同士が並んでいる写真も撮りました。

母の病気は、原因がわからないまま良くならないので、私が中学三年になる春休みに、広島から母の実家の山口県萩に引つ越すことになりました。そのときヒサコ叔母さんが、

「幸ちゃんは、広島に残つてうちに来たら？ 学校も転校しなくていいし」と言ってくれました。母も、

「幸ちゃんがヒサコ叔母さんの家に行きたかったら、そうしたら？」

と勧めてくれました。「ああ、いいなあ」と思ったものの、病気の母と小さな弟の世話は誰がするのだろう、弟は毎日泥んこになって帰つて来るので、洗濯だけでも大変です。母が困るからと私は萩に行くことにしました。

ある日母が、

「幸ちゃん、話があるんだけど」

と寝ている床の側に座らされました。

「実はね、このことは一雄お父さんの遺言で、決して幸に話してはいけないうって言われている

ただけだね、ヒサコ叔母さんは、本当はあなたのお母さんなの。幸ちゃんが生まれた時、子どもがなかった進藤家に貰われてきたの。それで、幸ちゃんが進藤の長女として生まれたように、戸籍まで偽って届けてあるの。でもね、いつかこの事実をあなたが知ったとき、ヒサコ叔母さんが本当のお母さんなら、あとき好村の家に行ったのに、とあなたに後悔されたらお母さんは一生悔いが残るから、思い切って話すことにしたの。だからもう一度、よく考えなさい」

そのとき私が受けたショックはあまりにも大きく、起き上がれなくて学校にも行きませんでした。あんなに優しかった両親が私の本当の親でなかったなんて、信じられません。けれども、私の決心は変わることもなく、私は母と弟と萩に行くことにしました。

その間、ヒサコ叔母さんは私の学校が終わる時間を見計らって校門の前で待っていたり、進藤家にも訪ねて来ました。ある日、高須の進藤の家に来たヒサコ叔母さんが帰る時、私は電車の駅まで見送って行きました。そのときヒサコ叔母さんが、ガランとした誰もいない電車のプラットフォームで、

「幸ちゃん、私をお母さんと呼んで」と言いました。

「一回でいいから呼んでみて」

「……………」

「うちに来て、みんなと一緒に暮そうよ」

「……………」

私はどうしても「お母さん」と呼ぶことができず、頑なに口を閉じたままでした。電車が来るのが待ち遠しく、遠くまで見える一本線の線路に目をやって、早く電車が来ないかなあと願ったものです。

ヒサコ叔母さんが私の生みの母であることを素直に認めることは、その頃の私にはどうしてもできませんでした。昭和のモガといわれ、女性にはめずらしく英文タイピストとして働いていたヒサコ叔母さんは、いつも派手な装いを好んで、タバコを吸っていました。私は女の人がタバコを吸うのを見たことがありませんでしたから、彼女の奇抜な服装とタバコをふかす姿は、実の母として受け入れられませんでした。ヒサコ叔母さんには、私を手放して以来、実母でありながら、一緒に暮らせなかつた複雑な思いがあつたでしょう。

でも私は進藤家で、目に入れても痛くないほど可愛がられ、情け深い母から、実子以上の愛を受けています。今生活が苦しいから、生みの母があらわれ、そこには兄や妹がいるから

などの理由で、好村家にいくことは到底できません。私はただ進藤家の娘でいたかったので  
す。

\* タケノコ生活… 家計困難のため、たけのこの皮を一枚一枚はぐように衣類、家具  
などを次々に売って生活していくこと。(日本語大辞典・講談社)

第二部  
萩、  
広島、  
東京



みさを母、弟雄太と共に。(1953年)



## 狸が入る蔵

そこは窓がひとつだけある、母屋の裏の酒蔵を改造した部屋でした。入り口の板戸の上から光が入ってくるので、蔵にしては明るく畳も何枚ありました。しかし、土間に作られた台所には水もなく、かまどと七輪がついているだけです。山口県萩市浜崎一区、そこが被爆後の私たち、母と弟、三人の移転先です。私は十五歳、弟は六歳でした。

大きな母屋には母の兄の斉藤一家（子ども三人）と母の姉の三好一家（同じく子ども三人）とが壁を仕切って住んでおり、台所と風呂場は三世帯の共同でした。私は中学三年生でしたから、料理らしい料理を作ることはできませんでしたが、母屋の叔母たちが差し入れをしてくれました。叔父は漁船を持っていたので、網が上がるど新鮮な魚を漁師が持つてきます。叔母がそれをお刺身、お煮付け、焼き魚、干物にしていました。冬にはふぐチリやふぐ刺しをよくいただきました。野菜はいつも裏庭から新鮮なのが採れたので、私は食料を買いに行つた覚えがありません。

従兄弟が六人もいましたから、遊びにはこと欠きません。広島時代に比べてにぎやかな生活でした。お正月をはじめ、お祭りなど四季折々の行事のたびにあちらこちらから親戚が集まり、お膳が出ていました。私はもっぱらお運びをしていました。叔母は遠州流茶道の先生でしたから、しつけが厳しく、お行儀や礼儀、人様への気配りなどを日常の生活で学びました。母は、原爆病の一種のブラブラ病でしょうか。体力がなく、寝たきりで心も病んでいたようです。でも医者にはかかっていませんでした。

弟の雄太は八歳のやんちゃ坊主で、毎日泥んこになって遊んでいましたから洗濯物がたまります。母屋のお風呂場で洗濯たらいと洗濯板でのごしごしと洗います。それらを物干し竿に通して干すのですが、一五〇センチ足らずの私には大変な仕事です。洗った洗濯物が落ちないように竹棒を使って右と左の両端に立っている柱にバランスを取りながらかけていくのです。落としたら洗い直し。でも青空にひらめく洗濯物を眺めるのは気持ちのいいものでした。

ある夜中、突然ドンという物音がして、寝ている私たちの寝床に野生の狸が入ってきました。そこは蔵に畳が敷いてあるだけの仮住まいでしたから、戸を開けると十畳ぐらいの部屋に母、弟、私が寝ています。食事は同じ部屋で折りたたみ式のちゃぶ台で食べ、同じちゃぶ

台で勉強をしていました。そんな部屋に入ってきた狸は小さくなって、たんすの隅に隠れています。

私は、ひよこ、にわとり一羽でも怖いのです。弟に手伝ってもらい、ほうきの先でつつき、部屋中を駆けまわる狸をやつとのことので追い出しました。入り口の戸は下の方が薄い板だったので、壊れて障子紙が貼ってあったのですが、狸はそこをやぶつて入ってきたのです。

そんな部屋でも原爆で家を失った被災者が建てているトタン屋根のバラック小屋を思うと、私たちには上等の家でした。その頃の広島では、焼け跡に TENT を張ったり、焼け残りの板を組み合わせた家がいたるところにありました。トタン屋根は雨が降ると雨の音で家族の話が聞こえなくなり、音は眠りも妨げます。雪の日は壊れた窓ガラスや戸の隙間から粉雪が入ってきます。そんな街に、戦災孤児になった子どもたちがたむろしていました。七十年は草も木も生えないと言われた広島でしたが、翌年にはキョウチクトウが赤い花をつけて咲き始めました。廃墟と化した広島は、復興を目指して新しい街造りが始まっています。

それに比べて、城下町の萩は戦争の被害にあわず、土塀の中に静かなたたずまいの家があり、夏みかんがたわなに実っていました。私たち一家はそこで四年間を過ごしました。広島

の家は借家にしたので、我が家の家計はその家賃からまかなっていたのだと思います。不思議なことに、その頃を思い出しても、私はお金を使うとか物を買うことを覚えていないのです。ひたすら家事をこなし、学校に通い、休みには母屋に行つて従兄弟たちと花札、石蹴りなどをして遊ぶという生活の繰り返しでした。



## 除霊

母が床にふせつているとき、大川原さんというおばさんが毎日のように尋ねてこられます。母と話をした後には必ず、除霊といって大川原さんは自分の手を母の額に当てたまま、眼をつぶつてお祈りのような瞑想をしていました。それが今で言う新興宗教だったのか、単なる癒しなのかわかりません。母は大川原さんの訪問を楽しみにしていました。社会から隔離

され、蔵の中でじっと病にたえていた母の慰めは大川原さんでした。

後日、年を重ねた母と萩の思い出話をしていると、

「お母さんの病気はね、大川原さんに治してもらったのよ。あの人は私の命の恩人よ」と言っていました。

月日は人の心を癒してくれます。母は二年目ぐらいから元気を取り戻し、保険会社の簡単な事務と掃除をして働くようになりました。たまに会社の集まりや忘年会で遅く帰る母でしたが、人間らしく活気に満ちていました。勤勉で気品のある母は“掃きだめの鶴”というあだ名をもらっていました。そんな母はいつでも、

「皆さんによくしていただいて、お母さんは幸せよ」と口癖のように繰り返していました。

長患いをしたにも関わらず、医者に通うこともなく、大川原さんにはげまされて元気になった母。四〇歳を過ぎ、病み上がりの体で初めてのお勤めは、つらい日々もあったと思います。が、家族を支えてくれた母を私は心から誇りに思います。

齊藤家（母の兄の家）と進藤家は浄土真宗でお経をあげたり、“南無阿弥陀仏”と朝夕仏様を拝んでいました。三好家（母の姉の家）は日蓮宗なので、木魚の音とともに“なんみようほ

れんげきょう”が祈りのことばです。酒屋でしたから高いところに神棚もありました。法事のときはお坊さんが来られ、お線香の匂いが家中に漂います。朝から部屋の掃除、お供え物、お花、お茶、食事の用意など女たちが手伝っていました。忙しい中にも厳肅な、そして素朴な田舎独特の雰囲気がありました。

行事の時につき物の、ちらし寿司、おはぎ、お赤飯、酢の物、おにしめ、お刺身、冷やし素麺などは、カナダに住んでいる現在、日本料理の基本となつて、子どもたち、親戚の間では“幸の料理”として喜ばれています。私はクリスチャンに変わりましたが、今でもこれらの仏事は心休まる思い出です。

西の京都と呼ばれている萩に、当時唯一のセントラルという洋画館がありました。そこには三人の姉妹がいて、その中の二級上の洋子ちゃんと仲良くなりました。



## 萩の思い出を胸に、故郷広島へ

私はいつも家事をしていたので、たまにしか会えませんでした。洋子ちゃんが切符切りの店番をする時は、

「映画見に来ない？」

と言われて裏からそっと入らせてもらい、映写室から見せてもらったものです。

この洋画鑑賞は、私の唯一の贅沢な時間でした。外国はまさに夢の世界。『若草物語』のベスが鼻を高くしたくて、洗濯はさみを鼻に挟んで寝るシーン、西部劇の『シエーン』では、「シエーン、カムバック！」と叫ぶ男の子を後にして、負傷した主人公シエーンが馬に乗って去っていくラストシーン……、スクリーンに映し出された物語の世界が、今でも眼に浮かんでいます。

また、大草郁子さんは私と同じ時期に、広島から萩高校に転校してきました。髪の毛がちよつとちぢれて鼻が高いので「ジャンヌダルク」とあだ名がついていました。郷里が同じ、

友達もいなかったもので、すぐ親友になりました。郁ちゃん、幸ちゃんと呼び合い、今でも姉妹に近い間柄を保っています。郁ちゃんは学校の帰りに私と一緒に家に来て、時々かまどの火をおこしたり、野菜を洗ったりしてくれました。普通友達と一緒にすることといえば予習、復習、宿題、工作を一緒に作る、などですが、私の家事を郁ちゃんはよく手伝ってくれたのでした。

高校二年になると、進学組とそうでない組に分けられます。私は経済上、大学には行かせてもらえません。それに勉強をする暇もないというのは言い訳で、寸暇を惜しんで勉学に励むタイプではありません。周りの親戚は女の子はお嫁に行つて、いい奥さんになるといふ昔の伝統的な考えでしたから、当然普通のクラスに入り、郁ちゃんと校舎もクラスも離れてしまいました。その後、大学に入った郁ちゃんとは約六年間、離れ離れになっていましたが、東京で再会し、今日でも姉妹のようにしています。

私は就職をするため仕事を探さなくてはなりません。母は丈夫になったので、私の高校卒業と同時に一家で広島に帰ることになりました。当時、就職は男性優先でしたから、女の子の就職は現在よりずっと難しかったと思います。私の場合、父親がいらないという大きなハンデリーがあったため、母が亡父の知り合いの長沼さんをお願いして、広島相互銀行に履歴書

を出しました。しかし銀行は金銭を扱う仕事だから、片親はだめということだったんは拒否されました。それでも何とか入社できたのは、長沼さんのお骨折りと聞きました。

桜の咲く四月、母と弟と私は懐かしの広島へ希望で胸をふくらませて帰ってきました。



## 銀行員

紺一色に白い襟がついた銀行員の制服を着て、新入社員の入行式が行われた日。社長の講話があり、広島相互銀行の歌、銀行員としての誓いと心構え、注意などを直立して聞いた後、一人一人に辞令が手渡されました。そ



幸、銀行入社。(1953年)

れによると、私の本給はなんと三三〇〇円。「えっ！ たったこれだけ？」。とたんに後悔と不安が募りました。これだけの給料でどうして家計を助けながら、自分の小遣いをまかなうことができようか……。涙が出そうになりました。銀行に就職ができたことは私にとつて、大学に行く以上に嬉しいことだったのに。しかしもう辞めるわけにはいかない、決まっただもの。斜め前の人の辞令をそつとどくと、同じ金額が書いてありました。私だけではないんだ。でもなぜこんなに給料が安いのだろう。後でわかったのは、本給の他にいろんな手当やボーナスが年三〜四回出るので、女性の仕事としては悪くないのでした。社会のことは何も知らず、そろばんもできない私は、受付とか秘書の役に回されました。

同じ職場に林さんという、キャリアウーマンの先輩がいました。もたもたしている私を、影になり陽なたになりサポートして、頼りがいのある方でした。

ある日林さんは、女学生の頃、学徒動員で私の実家近くにある高須の軍需工場で作業中に原爆にあい、山に逃げたことを話してくれました。一九四五年当時、中学生以上は授業はなく、勤労奉仕をしていたのでした。『月月火水木金金』といって、土、日曜日はなく、学生たちは『必勝』と書いた鉢巻をして学校に行き、校庭にある『御真影』に頭を下げて一日が始まるのです。

勤労奉仕は各班に分かれ、それぞれの作業場に配分されたので、八月六日、林さんの友達の中で広島市内に出かけた人は、二度と帰ってこない人、大怪我をした人、後日原爆症で床に伏せった人、また、林さんのように、建物は崩壊しても、山に逃げて命拾いをした人など、運命は紙一重だったと話してくれました。

銀行員の中には他にも原爆にあった社員がおり、時々、腕や首に紫の斑点が出て、今日は体調が悪いと言いながら、それでも懸命に働いていました。

原爆投下から十年後の広島のは、とどころにバラック小屋があるものの、目覚ましい復興振りで、本通りの商店街、福屋百貨店、天満屋、音楽喫茶、おいしいケーキ屋、レストランなどが、軒並みにならんでいます。バーや飲み屋もたくさんありました。原爆投下当時、廃墟と化した八丁堀に、広島相互銀行の立派な本店がありました。私はそこで四年間、  
“お姫様”（何もできない、という意味）とか “何にも専務さん” と呼ばれ、家族的な雰囲気職場で、楽しくお勤めをさせてもらいました。

『日が上ると、……人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます。』



## 上京——お見合いと失恋

月足らずで生まれ、幼くして虚弱体質の上、過保護と原爆の影響とがあり、運動嫌いの私は、それでもまあまああの健康体でした。健康な時は自分が被爆者であることを忘れて生活していますが、何か体に異常が起きたり、病気になる、さては原爆病がでたかと不安と恐怖にさいなまされました。それでも、年頃になるとお見合いの話が持ち上がってきます。

当時のお見合いは、本人同士が会う前に、写真と釣り書きを相手に渡します。釣り書きとは、履歴、趣味、家族の経歴などを書いたものです。それを見て、お互いが会ってみようとなると、面会となります。二人の間を取り持つてくれる世話役の人はたいていは、ご婦人です。

母は多くの人に「娘をよろしくお願います」と、写真と釣り書きを渡して見合いを頼んでいました。一方で私はまだ二〇歳になったばかりだから、結婚に対して漠然とした気持ちしかありません。特定の恋人もなく、勧められるまま、何度かお見合いをしました。

私のハンディは被爆者、母子家庭、学歴は高校卒などでした。それでも交際をしようといってくれる男性がほとんどでした。周りの友達も一人、二人と結婚していきます。母は、「早くいい人を見つけて、幸を嫁がせたい」の一心でしたから、次々と話を持ってきます。そんな状況に私の気持ちはついていけません。母には育ててもらった恩がありますから、早く結婚して安心させたいと思いますが、気乗りのしない結婚はしたくありません。それで何時までも進藤家にいるよりは独立することに決めました。

「東京に行こう！」 何の目的も無いまま、東京での生活がどんなものかも考えず、すっと決めて母に話しました。

母は勿論のこと大反対でしたが、私の決心が固く、どうしても止めることが無理だと判断して、わらをもすがる思いで、中学生の雄太に、

「お姉さんが東京に行くと言っているので、行くのを止めてちょうだい」

と切実な表情で頼んだのです。けれども、母の気持ちとは裏腹に、私の東京への夢と希望は

大きく膨らんで、銀行を退職し進藤の家を出る準備をはじめました。

その頃読んだイブセンの『人形の家』という戯曲で、主人公のノラが夫のもとから去っていく勇氣にいたく感心したのをおぼえています。私も自由を求めて、独立しようと意気込み、母の気持ちを踏みにじってしまいました。この事件は、みさを母にとつても、私にとつても、人生のターニングポイントです。

東京で女の子が一人暮らしするのは大それたことと、母は東京に住んでいる私の実母のヒサコと話し合い、進藤家から好村家へ戻ることになりました。

みさを母はどんなにさびしい思いをしたことでしょう。母子家庭の子どもと指をさされないように、また継子扱いをしないで、実子以上に気を使い、義理の仲だということを表にあらわさないよう、愛をこめて育んでくれたのです。理想は、私が進藤家からお嫁に出してもらうのが一番の親孝行なのですが、私は強情に「東京に行く」と、自分の意志を通しました。

もともと私は好村家の長女ですから、この際、戸籍を好村に戻すことになりました。けれども、進藤家の長女と偽って登録されていた戸籍は、好村家の長女として移籍することは法律上無理で、養女となりました。ヒサコ母さんは、

「ごめんね、長女にできなくて。でも順番は 富士彦、滋洋、幸、俊子となっているからね」と慰めてくれました。

実父、好村春基は一九四三年に死亡、実母のヒサコは好文タイプ印書を経営しており、長兄、富士彦は早稲田大学生、次兄、滋洋は東海村原子力研究所勤務、妹、俊子は好文タイプ印書勤務でした。

東京では、二人の兄の友達から、映画、歌舞伎、お芝居に誘われました。スキー、山登り、湘南海岸での水泳と青春を謳歌しました。その中の一人、兄の友達の弟と、ある程度結婚を前提にしたお付き合いが始まりました。デートはお食事と映画のお決まりのコースです。商社関係の仕事でとても忙しい人でしたが、優しく誠実な人で、私は少しずつ心が動き、好きになり始めました。

彼の家にも招待されて、お母様と一緒にハンバーガー作りを手伝ったり、食事を共にしたり、週に一回か十日に一回ほどの割合で会ったのです。女性側は控えめになっているのが常識でしたから、私からは、一度母が用意してくれた歌舞伎に誘い、兄が二人を食事に連れて行ってくれた程度でした。

ある日、彼から電話があり、会うことになりました。が、いつもと声の調子が違うのです。

待ち合わせ場所も、殺風景なビルの一角にある待合所のようなところでした。何かおかしいなど思いながら指定の場所にいくと、彼はすでに来ており、事務的に言ったのです。

「あなたが原爆を受けていることで、母が反対しています。僕としては母の反対をおしきつてまで強く出ることは出来ません。あなたのことをPityと思います」

私たちはお茶も飲まずに別れました。当時の日本では、「原爆症は伝染する」という風潮がありました。彼の母親が私たちの交際を反対したのは、それが理由だったのかどうかはわかりません。が、どうであれ、この時の衝撃は、Pity という単語と共に忘れることができません。

私は家に帰って押入れの中で大声をあげて泣きました。原爆の傷跡が心の中でうずきます。私はかたわだろうか、まともな結婚を望むのは、被爆者にはムリなことだろうか。特に広島以外の土地では、原爆症はうつるといつて伝染病扱いをする人がいます。

私には声を大にして「そうではありません」と言い切るだけの自信がありません。このような偏見に対して、なすすべを知らず、社会の片隅で静かに人目につかないように暮らしている被爆者もいます。

原爆は人間の生活をこわし、心と体に傷をあたえ、人を好きになる自然な気持ちまで押しつ

ぶしてしまいます。

彼とは手を握ったこともありませんが、私はほのかな愛を抱いていたので、「一日でも彼と一緒に生活して、食事を作って身の回りの世話をしたかった」と思いました。

しかし若かったからでしょうか、しばらくすると普通の生活に戻ることが出来ました。

被爆者ゆえに結婚を断られた話は時々耳にしました。考えてみると、それは当たり前のことでしょう。何時発病するかわからない原爆病を体を持っているのですから。それにこだわらないで結婚する人の方が、むしろ稀といってもいいのではないのでしょうか。健康な子どもが生まれるかどうかも賭けです。被爆者との結婚は本人も相手も、強い愛情の絆と、勇気が必要でしょう。

その後、お見合いをしました。相手の人は世間並みにいうと、一流の大学を出て、お役所勤め、安定した収入です。何か期限付きのプロジェクトがあつて残業が多く、それでも一ヶ月に二、三回は会っていました。私は二十三歳、彼は八歳年上でしたから、お兄さんというよりおじさんのような気がしました。それだけ、大人でしっかりした人だったのでしょう。四ヶ

月ぐらい経って、婚約をしたと言われました。私は母に、

「そんなに早く？ まだ愛情を感じていないのよ」

と言うと、

「お見合い結婚は、結婚してから徐々に愛情はわくものよ」

と言います。被爆者であることは気にしない、嫁入り道具も要らない、僕は本と体ひとつあればそれでいいと言われます。母は、

「こんないい条件で、受け入れてくれる人はいないわよ」

と勧めます。愛情とはそんなものかな、と思いました。その人に、

「私の心があなたに向くまで、もうちょっと時間をください」

と直接頼みました。「どうぞ」と言われほっとしていると、お米の通帳が必要と言うのです。

理由は住宅官舎の申し込みをするには結婚前の場合、相手を証明するために必要なのです。

せつかく時間をかけてと思っていたのに。また、婚約指輪の話もできました。新婚旅行はどこに行こうか、など、私の心に反して、周りの条件が次々と決まっています。

気が重くストレスがたまっていきます。デートの前、鏡に向かってお化粧をしていると、涙が出て何度も化粧直しをしました。

「今日はいいわね。楽しんできてね」

と友達に言われると、悲しくなります。でも気持ちを奮い立たせて出かけました。二人の会話はもっぱら、将来の計画です。

時を同じくして、天皇家の貴子さんが民間の銀行員と婚約発表をなさり、インタビューで、「私の選んだ人を見てください」

と発言され話題になりました。私は自分のことを考えて、結婚しようと思う人に対して、それだけの自信も確信も、そして一番大切な愛もありません。将来に対して不安がつのつてきます。

ある日、私は誰にも相談せずに彼に会い、私の気持ちが未熟で、愛情がわいていないことをはつきりと告げました。彼は余り喜怒哀楽を顔に出す人ではなく、それでも青白い顔に血の気がなくなり、呆然とされました。とても誠実な人のようで、私が誘われるままに、デートを重ねていましたから、当然結婚を前提としたお付き合いでしたのに……。

どのようにお別れしたのか覚えていません。ただ大変なことをしました。相手を傷付け、周りの人の親切を踏みにじったのです。母は怒って、荷物をまとめてこの家から出て行けといました。婚約指輪の弁償もしました。以来、私は小さくなって、もう結婚のことは考えまいとかたくなになる反面、開放感が湧いてきました。

『天の下では、何事にも定まった時期があり、  
すべての営みには時がある。  
神のなされることは、すべて時にかなって  
美しい。』

伝道者の書 三章一、十一節



好村一家。前列左端が幸。(1962年)



## 電車の中で

広島から上京して一ヶ月もしない、失業保険をもらいながらぶらぶらしていたある日のことです。山手線車内でつり革を持って立っていると、突然私の耳元にわけの分からない声が聞こえてきました。見上げると、背の高い外人が私に向かって何か言っているのです。車内の乗客の視線がその外人と私に集中しています。恥ずかしくて、どうしていいか分かりません。車内には他にも人がたくさんいるのに、よりによってその外人は私に話しかけたのです。

きつと、「次の駅はどこですか」とかなんとか聞いたのでしよう。外人の生の英語など聞いたことがない私は、本当に恥をかいた思いで、次の駅であたふたと下車し、ベンチに座ってほとぼりを冷ました。

「東京は都会だ、いつ外人に話しかけられるかわからない。そんな時、簡単に返事ができるように英会話を習おう」

と私は決心しました。早速ハロルド英会話学院で会話と、津田英語塾で文法や読解を習い始

めました。

英語は中・高校のとき、「ホッテントット」というあだなの鼻の低いおよそ外人らしくない教師と、背の高いハンサムな教師から、「ジスイズアペン」とか、「ジャックアンドベティ」とか教科書にカタカナで仮名をふって、日本的な英語を習っただけでしたから、初級からやり直しです。家では大学院生の好村の兄から中学の教科書を基に特訓してもらいました。



### 心臓に毛が生えて

実母、好村ヒサコは八名のタイピストを雇って、「好文タイプ」という小さなタイプ印書の仕事をしていました。彼女は英文タイプが打てるので、東京都のオフィス街にある印書には、時々英文の仕事が入ってきます。仕事が多く期限に間に合わない時などは外注に出すことも

ありました。私はそこで午後から英文タイプ練習をしました。午前中は英語学校、退社後は週一回、神保町にある「スターファイヤー」というコーヒーショップで、英語でおしゃべりをするグループの集まりにも出かけていました。

私は好文タイプを辞めて新日本汽船という船会社に英文タイプピストとして勤め始めました。好文タイプのオフィスがある東京八重洲北口の鉄鋼ビルとなり、大和証券ビルの中に新日本汽船会社がありました。たまたま新日本汽船の英文タイプピスト募集という広告を見て、母が、

「受けてみたら？」

と私に言うのです。タイプピスト学校に行ったことはなく、母の店で暇なとき、チンタラ、チンタラ、と英文タイプを打つ練習をした只是因为、自信がありません。

「ものは試し、受けなさいよ」

と母は勧めます。私は、

「となりのビルだから、とりあえず行ってみようか」

と面接に向かいました。私の技量は、一分間に三〇ワードそこそこでしたが、実技のテストはありませんでした。

とにかく採用されたのですが、入社してみると、英文タイピストではなく庶務課で受付をするように言われました。そこで、

「私は英文タイピストですから、タイプが打ちたいです」

と受付を拒否すると、運よく英文タイピストのポストが与えられました。

けれどもそれからが大変。何しろ、正式に書類を打つたことがないので。当時のタイプは手動で、カーボンを入れて、五枚、十枚とコピーをします。そのカーボンの入れ方もわからず、裏表に入れたり、一字スペルを間違うと、コピーが多い書類は消していくのが大変です。何度も失敗すると紙が、カーボンの墨で汚くなったり、打ち変えた字がラインから飛び上がったたり、下がったり、穴があいたり、ひどい出来上がりになります。

私はベテランの雨宮さんという女性のそばに座られました。雨宮さんは社長や国際部長の手紙、契約書を打っています。私はそばで簡単な請求書を打つのですが、それがとても時間がかかるのです。パチパチパチでなく、パッチン、パッチンと打つのですから。雨宮さんは、よく我慢して私を傍に置いて下さったと思います。あまり長くかかって泣きそうになると、

「そごいで、私が打つわ」

ともの一分もかからず仕上げてしまいます。他のタイピストも嫌がらず、見守ってくれていました。

そこで私は八名のタイピストのお茶くみをし、おやつやランチの買い走りをしました。それでも一応英文タイピストとして、お給料、ボーナスも人並みにもらっていたのです。兄がその話を聞いて、

「幸の心臓には毛が生えているな」と笑っていました。

第三部  
チャックとの出会い



チャック帰国の日。横浜港にて。(1962年)



## 素足で私の心に入ってきた人

その頃現在の夫、チャールズ・ランメル(Charles Rumel)と出会ったのです。

「この人、本当にチャックさんかなー？ この間と同じジャケットを着ているから、間違いないだろう」。こんな思いで始まったチャックとのデート、ここは有楽町、三愛の角で、多くの人が待ち合わせをする場所です。チャックの方も、大勢いる日本人女性の中から私を見分けるのは難しかったようです。みな同じような顔に見えたそうです。私も外人を近くで見ることがありませんから、わかりません。お互いにしばらくは、何となく、待ちながら、様子を見て声をかけました。

「よくも他の人と間違えないで会えたね」

と後で笑い話になるほど、見分けるのが難かしかったのです。

一九六二年当時、日本ではアメリカ、カナダ、イギリス、ヨーロッパ各国の人たちを外人とよんでいました。ほとんどはアメリカ人だったのではないかと思えます。横須賀、厚木、

立川、横手、所沢にはアメリカの基地があり、G I、ヤンキー、毛唐と呼ばれる兵隊が東京の街を闊歩していました。

最初チャックと会ったのは、私が通っていたハロルド英会話のグループが集って、週一回フリートークをしていたジャズ喫茶店です。メンバーは、慶応大学、青山学院、京大などでみっちり英語を勉強したサラリーマンですから、私はただ聞き役として座っているだけです。

その日は新日本汽船会社の森本さんと二人で参加していたのですが、そこにゲストとして、チャック（チャールズ ランメル）がやって来たのでした。

七、八名の仲間がテーブルを囲んで、コーヒーをのんでいる中に、チャックを見たとき、私は、何と鼻が高くて彫りの深い顔だなど思いました。チャックは、

「ハジメマシテ。チャックデス。Y・K・Kノ チャックデス」

と胸のあたりでジッパリーのチャックをあげたりしめたりする手つきをしたので、思わず吹き出しました。

目が合ったとき、彼の目は大きなビー玉のようで、日本人の黒目に比べ、焦点が合わないような感じでした。チャックの目はグリーン、薄茶、グレイが混ざっていて、着ている服の反射で色が変わります。

しかし、まさかこの人が自分の未来を変えようとは思いませんでした。

一方チャックは英会話グループが集まって話している、ジャズ喫茶店にゲストでこないかと友達のマックにさそわれ、コーヒーがフリーということも魅力で、冷やかし半分に行くつもりで、丸の内南口で待ち合わせていました。マックは一向に現れません。痺れを切らして帰りかけたとき、足早に向こうからマックがきたのです。

もしもここでチャックが一分でも早くその場を去っていたら…、私とチャックの運命は変わっていたかもしれません。

帰り道、神田駅に向かって歩いている時、たまたまチャックがポケットから手袋を出した時に、千円札がひらりと落ちました。私はそれを拾って渡したのですが、チャックは今でも、

「幸は千円札に釣られてしまった」

とからかいます。私は山手線で神田から、品川、目黒まで。森本さんは五反田でしたから方向が同じでしたが、チャックのホームステイは戸塚なので別方向なのに、乗り換え駅が来ても彼は降りません。二人の男性に囲まれ他愛のない話を楽しんでいましたが、ほどなくお別れの時がやってきました。チャックはジェスチャーで眼の涙を拭いて、その涙をポケットに入れる真似などをして、さようならと言いました。彼のユーモアにはここでも笑わせられた

のです。

しばらくしてチャックから電話がありました。電話番号など教えていないのに……。

「両親が新日本汽船の貨物船で日本に来るのだが、その船の到着する港を知りたい」といいます。貨物船は荷積みや港の船舶の混み具合で入港先が決まるのです。

調べてみると、チャックのホームステイ先の近くの横浜港でした。

チャックの両親は三週間の日本旅行を楽しみました。日本テレビの撮影スタジオ見学には私も連れて行ってもらいました。チャックのお母さんと衣装室に入って、時代劇のかつらをかぶらせてもらったりしました。私はかんざし付きの若い娘の桃割れ、お母さんは飾りのない黒髪のかつらです。そのかつらは、面長な彼女の顔によく似合っていました。彼女は私を見て、

「貴女のほうが良いわ」

とうらやましそうでした。

日光へも行き、東照宮、見ざる、聞かざる、言わざるを見て喜んでいました。

行動を共にして色々と考えさせられた事がありました。チャックが置き忘れていった荷物を、私が持つて行こうとすると、彼のお母さんは、

「放っておきなさい、それは彼の責任だから」

と言って止めたのです。なるほど、これも教育のひとつかなと感心しながらも、もし無くなつてしまったら……、と心配していると彼はあたふたと帰って来たのでした。

彼のお父さんは体の大きい物静かな人で、私と並ぶと、巨人と小人みたいでした。生活の中  
からこつこつとお金を貯めて日本旅行が実現した  
のだそうで、出費一切を彼がコントロールしてい  
ました。

チャックのガールフレンドでもなく、英会話も  
ろくに出来ない私を、彼らは日光や鎌倉へ一緒に  
連れて行ってくれました。案内役にしてはろくに  
英語がしゃべれない、謎めいた小さな女の子が行  
く先々で現れるので、チャックの両親は「また今  
日もチャックについて来てる。もしやチャックの  
ガールフレンドかな？」と疑ったことでしょう。



日本旅行をするチャックの両親と共に。(1962年)



## 寝台車安芸号

被爆者でもある昔の銀行の上司が出張で東京に来られた時、

「いい人を紹介しよう」

と東京に勤めている広島出身の男性A氏を紹介してくださいました。A氏は背が高く、垢抜けたサラリーマンです。私にはボーイフレンドがまだいません。チャックは外人でしたから、英語の練習のために付き合う程度のものでした。

やがてA氏に広島の両親に私を紹介したいから一緒に帰省しようといわれ、広島の母にも会えるしと思い、寝台車安芸号で帰省しました。でもお互いの実家に行って挨拶するだけのトンボ帰りです。そのころのサラリーマンはモーレッツに働いていましたから、ゆつくり休暇などとりません。チャックに広島に行くことを話すと、日程を聞かれ、その予定を伝えました。

さて、帰京の日。安芸号は夜広島を出ると朝東京に着きます。静岡にさしかかった頃にA

氏に起こされ、私は生まれて初めて頂上に雪を被った富士山を見ました。その美しさは言葉にならないほどでした。

横浜を過ぎたあたり、一人の外人が車内を横切つて行くのが見えました。その外人は二度も三度も行つたり来たりします。髪は栗色、長い顔に鼻は高く、彫の深い大きな目は真剣に前を見たまま、またもや通路を足早に通り返けます。手にはベルトに巻いた数冊の本。

普通の乗客の雰囲気ではなく、探し物でもしているのか、あせつた様子。よく見ると、どうもチャックに似ているのです。しかしこの寝台車にチャックが乗っているはずはないので、似た人もいるものだと思つていました。列車はいよいよ東京に近づき、私はトイレに立ちました。するとどうでしょう！ 車両と車両の間に立つて本を読んでいる外人は、なんとチャックではありませんか！

「あら！ チャックさん！」

と私は叫びました。

「オー、サチ、グウゼンネ。キミダツタノ」

と彼は言いました。

「どうしてチャックさん、安芸の寝台車に乗っているの」

「ウーン、キシヤノ ジコクヒヨウミテ イロイロシラベタヨ」

「でもよく、わかつたわね」

「ヒロシマ シハツデ、 トウキョウニ アサツク キシヤ ミツケテネ。イチカバチカ  
ノツタラ サチガイタ」

「じゃ、さつき、偶然と言ったのはうそだったのね」

「ウン、ミツケルノ タイヘンダツタ！」

あつげにとられている私の前で嬉しそうに笑っています。数本ある中でよくこの列車を見つけたものだとなかば感心しながらも、座席で待っているA氏のこと気がかかっていたので、

「じゃあ、またね」

とそそくさとその場を立ち去りました。

A氏と私は東京駅に着きました。改札口を出て、八重洲口にある国際観光ホテルのコーヒーストップで朝食をとろうと歩いていると、何とチャックが後ろからついてくるではありませんか。私はA氏にチャックを英会話で出会った留学生であると簡単に紹介しました。A氏は嫌な顔もせず、

「では一緒にコーヒーでも飲みましょう」

と快く誘ってくれました。チャックは無邪気に、

「ソウデスカ、アリガトーゴザイマス。ジャ」

と日本人が照れた時に頭をかくジェスチャーをしてうれしそうです。

三人での奇妙な朝食が終わり、A氏は丸の内方面へ、私は会社のある鉄鋼ビル方面へ進みました。A氏と別れた後も、チャックは私についてきます。

「ニモツモツテアゲル」

と私の荷物に手をかけて、並んで歩き出しました。「しつこい人だなあ」と思いつつも、なんだか憎めないチャック。二人はただニコニコしながら朝の東京を一緒に歩いたのでした。



## デート

チャックは男友達の一人でしたが、私の理想の結婚相手は、五歳位年上、大学出、安定した職についていて、心が優しく背が高くハンサム、などなど、年頃の女性が夢見がちな男性像を描いていました。チャックは二歳年下、学生、さらに外人で、まったくわたしの興味の対象外。英語の練習のための友達でした。

けれども彼の友達や英会話グループでは、外人とつき合っている日本女性が数名おり、休日になるとそれぞれのカップル同士でお弁当を持ってハイキングに出かけるのです。その中で、婚約している二組のカップルはとても幸せそう。歩く時には腕を組み、互いに見つめ合い、ダーリンだのハニーだのと呼び合っています。

私にとつて彼らは刺激的でうらやましくもありましたが、チャックがそのようなしぐさをすると、私は彼の手をはねのけてしまうのです。

それでもある時、チャックとのおしやべりに夢中になっていると、自然に自分の手が彼に

触れているのに気がつきました。

「あれ！」

恋は盲目なりといいますが、少しずつ恋心が芽生えたのでしょうか。

やがてチャックの帰国日が近づき、そうになると、二人の間も急速に進展し、言葉のハンディーでお互いの意志表示をするのは至難のわざながら、その気持ちをどうしようもないまま毎日のように会っていました。

私は時々チャックを我が家の食事に招待しました。

その頃広島から叔母（母の姉）が同居していたのですが、チャックが来ると、叔母は隣の部屋に入って絶対に出てきません。彼女は喘息持ちなので、時々咳をします。食事もあとで食べるといつて一緒にしません。これは西欧流に言えば全くマナーに反するわけで、チャックは彼女が咳をする度に「早く帰れ」というサインではないかと気にしたのでした。それでも叔母はチャックの姿をふすまの隙間かどこかで見たのでしよう。

「さっちゃん、あんた、あの人が好きなん？」

「そうよ」

と答えると、

「まー、あがいな人と結婚してみんさい、髪の毛がちじれて、眼のあおい子が生まれるけえ、いびせえのー（気味悪いなー）」

と広島弁で言うのです。

しかし、そんなことはお構いなしに、私たちは会っていました。

デートは主に、ピクニックと山登りで、鎌倉の大仏様、銭洗い弁天、建長寺、円覚寺、奥多摩など、東京の近郊にでかけました。私はお弁当作りが楽しくて、嬉しくて 朝早くおきて台所に立ちました。日本の男性とのデートはタクシーに乗って、映画やお芝居を観にいきました。チャックは何時も歩け、歩きのデートです。タクシーには一度も乗ったことがありません。

知り合って間もないのに、チャックとはずっと前からの知り合いのようで、外人という違和感がありません。私を自然に受け入れてくれ、人種偏見がなく、日本人を、日本の文化を率直に理解しようとしています。そして、日本が大好き、好奇心の塊で行動派の彼は、日本中をまるで散歩にでかけるように旅する冒険好きな外人です。

私にとってチャックが原爆を落としたアメリカ人でなく、カナダ人であることは重大なポ

イントでした。

聞けば、カナダのチャックの家の近くにサーモン（サケ）の缶詰工場があり、彼はティーンエイジャーの頃そこでアルバイトをしていました。魚のはらわたを出す作業をしているのは日系人が殆どでしたから、彼らと親しくなり、日本の話を聞き、お正月料理をご馳走になり、魚用のタンクで作った五右衛門風呂に入っていました。佛教会、空手道場、日本語学校、そして盆踊りに参加、日本にあこがれて、寝室には世界地図と日本地図を貼って、「いつか日本に行こう」と夢をさせていたそうです。

彼のバンクーバーでの生活の話を聞いていると、私は安心感と共にチャックが単なる物好きで日本に興味をもっているのではないことが理解できました。

今日は最後の夜。知り合って七ヶ月たらずですが明日はお別れです。私たちは公園の芝生に座わり、肩を組んで夜空を見上げています。二人とも、何を話していいか言葉になりません。

「これから先、どうなるの」

私はぼつんと聞きました。しばらくして、

「I love you」

と彼は言いました。静かな夜です。チャックは空を見上げ、あの月に雲がかかっているよう

に、私たちの将来ははっきりしないと答えました。私はチャックの胸の中で泣きました。



## 白いテープ

チャックがカナダへ帰国したのは、一九六二年の夏。平塚七夕祭りが終わり、ロマンチックな天の川を眺め、年に一度の織姫と牽牛のデイトの話を語り合ってからでした。私は横浜港に見送りに行きました。

そこには彼の教え子が数人と何人かの友達が来ていました。焼け付くような暑い日でしたが、港の風はそよ風です。ピアーには他の乗客の見送り人が大勢いて、楽しそうに話しています。白い大きな船が停泊していました。チャックは見送り人に囲まれて、嬉しそうにはしゃいでいます。

故郷に帰るのですから当たり前ですが、私は反対に胸が一杯でした。近寄ったとしても、個人的に話すことも出来ず、少し離れたところに立っていました。もうこれが最後かな。

チャックは遠くに行ってしまう。カナダってどんな国だろう。アメリカの一部と聞いていたが、カナダという独立した国があるんだ。チャックはアメリカ人じゃなくてカナダ人と聞いた。この船でカナダまで、どのくらいかかるのだろう。バターやミルク、チーズがいっぱいある国だって。チャックは家に来てパンを食べる時、バターをいっぱいぬるので、お母さんが、

「チャックが来るとバターがなくなる」

と文句を言っていたけど……。さまざまな想いがよぎっていきます。

やがて、乗船の時間が来て、チャックは足早にタラップを上っていきました。「私のことは別に何とも思っていないみたい」。彼の後姿を見ながら自分に言い聞かせました。船が出港するまでにどれくらいたったでしょうか。長いようにも短いようにも感じられました。見送る人、見送られる人の間で色とりどりのテープが投げ交わされ、そのテープは陸と海をつないでいます。別れの曲が流れはじめました。

「さようなら！」

「元気でね！」

なんと単純な響きに聞こえたことでしょう。船は静かに棧橋から離れていきます。棧橋と船の間の空間がみるみる広がっていきます。

突然、一本の白いテープが私をめぐって飛んできました。チャックが全力で船上から投げたのです。私はそれをキャッチしました。風に揺られながら私たちをつないでくれた白いテープ。チャックは右に左にと、他のテープに絡まないようにデッキの上で調節しています。船の進行とともに他の絡み合ったテープは切れていき、だんだん数が少なくなっていきます。

でも、私とチャックが握っている白いテープはまだ二人をつないでいます。最後に私たちのテープ一本が残りました。私は船を追っかけながら、テープが巻いてある丸い輪を解いていきます。周りの人が拍手をしています。最後までその一本の白いテープは切れないで、私の手を離れてひらひらと海の上を舞っています。

私はチャックの乗っている船と、彼が握っている白いテープを追って、岸壁を走りました。見送りの人たちの拍手が続いています。青い空、青い海に囲まれた横浜港は、夏の太陽を受けて光っています。だんだん船上の人たちが小さくなっていきます。チャックは人目に付くように乗客から離れて手を振っていました。やがて海の彼方の人となりました。

『愛は結びの帯として完全なものです。』  
コロサイ 三章 十四節

第四部  
カナダへ



バンクーバー港に到着。(1963年)



## 送られてきた小切手

チャックを見送って、横浜港からの帰途、汽車の窓から変わる景色を眺めていると、じわと寂しさがつのつて涙が出てきます。

チャックと一緒にいる時は、浮ついていたのか、それほど深刻でなかったのですが。それにチャックが外人であることを意識して、二人の仲が抜き差しならないようにしていた私でしたが、彼がカナダに帰って行った事実を素直に認めることができませぬ。国や言葉の違いを乗り越えて、私のチャックに対する恋心は別れと共に募りました。そんなことないつもりなのに……と心の中で自分に言い聞かせ、ハンドバッグの中から本をとりだして読みはじめましたが、同じページを何度も何度も繰り返し返しては読んでいます。こんな気持ちで納得いきませぬ。やっぱり私はチャックが大好きなんだ、でも、はるか彼方に行ってしまう、どうしよう。

以来、私たちの文通が始まります。お互いに片言の英語と日本語か、または両語が混じっ

た、つたない文章です。時々、英会話に通って仲良しになった、青山学院英文科卒業の昌子さんに、翻訳をしてもらいました。

私は毎日、郵便箱をのぞいて、赤と青の斜めの線が入っている国際郵便の封筒がくるのが待ち遠しく、チャックからのラブレターを待っていました。彼は筆不精とはいえ、一〜二週間も手紙が途絶えることがあり、悲しくなりました。そんなときは国際電話がかかってきます。カナダと日本の時差の関係で仕事場にかかるのです。電話交換手が

「カナダから好村さんに国際電話です」

とタイプ室にかかってくると、タイピスト達は耳を澄ませて、興味津々と聞いています。会話と言っても、「元氣ですか」から始まって、天候の話、他愛ない話で終わってしまいます。

彼は家の近くの小さなモールにティールームをオープンしてとても忙しく、手紙を書く暇がなくなってきました。

一九六三年の夏の日。カナダから書留郵便が届きました。思いがけないチャックからの手紙で、「バンクーバーに来てください。そして、私の家族と友達に会ってください。この国が好きになれるかどうか、まず来て、幸の眼で見てください」とあり、交通費として四〇〇ド

ルの小切手が入っていました。当時一ドルは、アメリカカドルよりも高く三八〇円でしたから、かなりの金額です。どうしたものかとしばらく考えました。母、兄、友達に相談して、とにかく行ってみようと決心したのです。

母は、

「このお金はチャックさんに返しなさい。私が幸のお嫁入りのために貯めておいたお金を出しましょう。その代わり、もうこれだけよ。帰ってきて先はどうなるか。それに外国帰りとなると、＼ギズモノ＼と言われてお嫁の貰い手もないからね。自分の行動には自分で責任を持ちなさいよ」

と言い、しばらくの滞在費も工面してくれました。

飛行機は高嶺の花でしたから、私は勤めていた新日本汽船の貨客船に乗りました。外国航路の船などに乗ったことがなく、太平洋の海原は、行けども行けども、空と海の連続で、果たしてカナダに着くのかなと不安でした。船酔いにかかり、食べたものはみんな吐いてしまうので、オレンジージュースと水でしのぎました。

朦朧とした意識の中で他愛の無いことが頭をよぎります。寒い国へ行くので、赤いブーツを買った時、靴屋のおじさんが、

「赤い靴はいてた、女の子、異人さんに連れられて、行っちゃった」と歌いながら、

「それで、君の恋人は何しているの、きこりかい」

と聞かれたこと、チャックの近所の友達の名前が『Forrester』、住所は『Bear Lane (熊路)』となつてゐるから、きつと熊が出る森の中できこりが住んでゐる山奥かな、「サイプレス・パーク・テイルーム」は、どんな喫茶店なのだろう。チャックは日本語忘れていないだろうか。船酔いの辛さは、車酔いとは桁違いの苦しさでしたが、もうすぐチャックに会えると思うと我慢のしがいもあるというものです。

ついに十四日目、船は朝もやの中、バンクーバーの港を目指して、入り江を進みます。森のような茂みの向こうに、緑の高いとんがり帽子の屋根や、高層ビルが見えます。港には、チャック、彼の父親、妹のドロシー、美香さん、フォレスター夫妻が迎えに来ていました。私はチャックの頼みで和服に着代えて下船しました。その着物は淡いピンク地にバラの花が飛んでゐる訪問着でした。

私たちはまずコーヒーショップで一休みし、その後バンクーバーで最も美しいクイーン・エリザベス・パークへ行きました。日本庭園に比べ、花が咲き乱れ芝生が見事なイングリッ

シユガーデンです。日本では芝生の中に入ってはいけないというのが常識ですが、ここでは踏んだ方が芝生は強くなるという考えです。入場料も無く、花園の間にリスがちよろちよろ走り回っているのも不思議でした。青い空はどこまでも高く、広く、空気は澄みきっていて、日陰に入るとひんやりして、のどかな憩いの時間が流れます。長い船旅の疲れをバンクーバーの町は一日で癒してくれました。



## 森と湖の国

森と湖の国、カナダ。世界第二に大きい国。面積は日本の二七倍です。二〇一二年現在、人口密度は日本の約百分の一とか。つまり一平方キロメートルの面積に対して日本は三百三十二人、カナダはわずか三人という計算になります。一九六〇年頃の人口密度は、一

平方キロメートルに一人の割合でした。また、数多くの湖があると聞きました。カナダは自らが戦争宣言をしたことが無く、国民の手が汚れていない国です。空気は澄み渡り、町は芝生と樹木に囲まれ、歩いて歩いても靴が汚れません。実際、靴のまま家の中を歩く習慣には驚きました。道路は広く、歩行者がほとんどなく、どの家も庭には芝生が敷き詰められて百花繚乱です。家と家との間には垣根がなく、カーテンも常時開いていて、夜など明かりをつけてパーティーをしているのが外から丸見えです。鍵などほとんどかけないようで、まるで平和を絵にしたような町でした。

カナダ三大都市の一つ、バンクーバーには、日本の和歌山、広島、滋賀県ほか、明治時代から移民した日本人の二世が住んでいます。彼らは日系カナディアンとよばれ、第二次世界大戦中、カナダに忠誠を誓わない人たちは、日本に送還されました。忠誠を誓ったにもかかわらず、残った日系人は、アメリカに住む日系人と同じく、ヘイスティングパークにある馬小屋に、男女別に強制収容され、そこからまた、各州のへんびな山奥などに、移動させられたのだそうです。

その中の一人、米田一雄（ジョージ）さんは、ミントという村の森林で、伐採した丸太を板に削っていく仕事につきました。ここでは、川の水を汲んで食事を作り、夜はガスランプ

をともして本を読む。トイレは自分たちで仮設したのがありましたが、マイナス二〇度、三〇度の冬には、用をたすとたちまち凍ってしまったと話していました。戦後十年近く経て彼らは解放されましたが、今まで持っていた漁船、家、車、土地、仕事の権利等、一切の財産は没収されており、ほとんどの人がゼロから再出発したそうです。

米田一雄さんは三四歳の独身の頃、人里離れた山の中では女性に出会うチャンスがなく、日本に帰ってお見合いをしたらということ、仕事を休んで帰国しました。数人の女性とお見合いをした中で、十三歳年下の広島溝口美香さんに一目惚れし、一ヶ月以内に籍を入れて、呼び寄せ（妻）の手続きをしたのでした。美香さんはその頃カナダの国の存在など何も知らずで、それだけに外国にあこがれる好奇心もあつて結婚を決意したそうで、周りの人たちはからはハワイにお嫁に行くのでしょといわれたそうです。一九五五年のことです。

この溝口美香さんと私の縁は、互いの親の代から現在まで続いており、第二の故郷となったカナダで、日本人の肉親がない二人にとって、唯一のわがままが言える間柄となっています。

美香さんは、私と同じく被爆者です。家は中心地よりも五キロ離れた祇園ですが、家屋の一部が崩壊され、ガラスがわれ、天井が吹っ飛び、屋根が落ちたりでした。女学校一年生の

美香さんは教室の真ん中にいたので無傷でしたが、窓の近くにいた生徒はガラスの破片で怪我をして血を流しながら下校しました。彼女は学校からの帰り道、広島町の町から逃れてくる負傷者をまともに見ることができなくて、両手で顔を覆いながら歩きました。

上級生の幼馴染みの近所の友達は男女共に、学徒動員で船を造る工場や、建物を解体する作業のため広島町の町に出かけ、そのほとんどが帰らぬ人となりました。生き残った一人は耳がやけどで、とけています。真つ黒にこげたパンツを見せてくれた女の子もいました。美香さんが数日後、お母さんと一緒に広島町の町に行つたとき、乳飲み子の弟さんの口のまわりにハエが止まって、真つ黒になっている光景に接しました。母乳が口についていたからです。

原爆投下の後、広島には、うじ、シラミ、ハエ、ダニが異常に発生して、畳の上で、ノミがぴんぴん飛びはねているのがみえます。女の子は髪にシラミがわいて、お酢でとりのぞきました。このように人間や動物の死体にたむろしたものが、民家にまではびこつたのです。

高台の美香さんの庭から、焼け野原となった広島が一望でき、その中に、原爆ドームの広島産業奨励館と中、心地に近いコンクリートの福屋百貨店がそびえたっています。

夫の米田一雄（ジョージ）さんも広島出身で、兄弟、親戚のかたも被爆されて、亡くなったり、負傷されました。ある人はめがね屋に行くのに、めがねを忘れて家に取りに帰って広

島に行く汽車に乗りおくれた人、前夜からお腹が痛くて広島に行くはずなのに、トイレに出たり入ったりしていた人、自転車の荷台に積んである荷物をほどいたり、結びかえたりしている間に、原爆が投下され、現場に居合わせなかったために生き残った人達がいいます。それは一見すると幸運な話ですが、その裏には、その人たちは、自分が生き残って悪いことをしたような罪悪感にとらわれ、亡くなった人たちに申し訳ないという思いを持っています。

当時、未婚の女性が外国に渡る時、ビザが下りる条件は留学生か、結婚を前提にした呼びよせということに限られていたので、当然私には、許可が下りないだろうと思っていました。

ところが、三ヶ月の滞在許可がおりたばかりか、入国の時点でそれが一年に延長されたのでした。係員は、

「更に一年経って、もっと滞在したければ、ビザの延長に来なさい。でもおそらくお母さんのミルクが恋しくなるかもね」

と言つて、優しく私の気持ちをなごませてくれたのでした。私がコチコチに緊張していたのでしょうか。

バンクーバーでは米田さん宅にホームステイすることが決まっていました。

チャックと私を結ぶエンジェルは一人ではなく、多くのエンジェルがあちこちで準備を整

えてくれていたのです。

その頃ホームステイという言葉はなく、留学生はスクールボーイ、スクールガールと呼ばれて、篤志家の家で、無料で部屋と食事を提供してもらい、学生は子守や家事を手伝っていました。日本円の持ち出しはカナダドルに変換して三〇〇ドルと制限されていたようで、奨学金をもらっても、生活は苦しかったです。

私の場合、遊学といってもいいような、恵まれた生活でした。もともとはボーイフレンドに会ってその国を見るという目的で、三ヶ月の観光のつもりだったのが、滞在期間が一年に延長されたのです。米田さんは三歳と八歳の男の子があり、クリーニング屋を経営していました。私は家事を手伝いながら英語学校に通うということになりました。日系人の米田家は日本の生活の延長のようでしたが、それでも初めて経験する西洋文化、習慣が珍しかったり、驚いたり、見るもの聞くものが新鮮でした。

週末になるとドライブインシアターへ。これは日没後に始まる野外映画。広い駐車場のような広場には、マイクロホンが杭のような棒に立ててあり、そこからコードを引っ張って車の中で音声を聞きながら映画鑑賞をします。観客は毛布にくるまって、お酒を飲んだりスナックをつまみながら、リラククスして目の前の大スクリーンを楽しみます。

潮干狩りに行くと、すくいきれないほどの貝がざくざくと砂の間から出てきます。旅行はいつも車で、途中ドライブインというモーターに宿泊。食事はハイウェイのそばにある公園や休憩所、キャンプ場で簡単に作ります。レストランやお土産店などは、道路わきにはありません。ガソリンスタンドでドリンク、スナック、雑誌が買えるぐらいです。西部劇のインディアンが出てきそうな、広大な平原、美しい湖、溪谷、野生動物、野鳥、ワイルドフラワーなど、行く先々でカナダの大自然を満喫しました。

時々、土、日や夕食後には、ジョージの車で西バンクーバーにあるチャックの経営している「サイプレス・パーク・テイルーム」に連れていってもらいました。西も東もわからず、おぼつかない英語を使いながらも、チャックとのデートは楽しく、ホームシックにかかることもなく、幸せな生活を送っていました。しかし米田家での会話は日本語でしたので英語が上達しません。思い切って英語を話す家庭にホームステイをすることにしました。英語を習得するにはこれが一番の近道ですし、他のカナダ人の家庭にも触れてみたかったです。



## カナダ人の家庭にホームステイ

夏が過ぎ、木々の梢が色つき始めた頃、米田家を出て、まったくの異文化体験を始めた私。大和なでしこの前に、次々といろいろなことが起こって、一年間に四軒のホストファミリーを転々としました。あきれられそうですが、それぞれの家庭でハプニングがあり、移動せざるをえなかったのです。

私はバンクーバー・サン新聞に「当方、日本人学生。無料で部屋と食事提供を求む。代わりに軽い家事の手伝いをする」と広告を載せました。日本人は、正直、勤勉、きれいな好き、そして礼儀正しいという評判で、二〇軒近くの家庭から反響があり、その中から七軒くらいにしぼり、家を見せてもらい、面談をした結果、ユダヤ系の家庭に決めました。

私はトランクと柳ごおりに荷物をまとめて、迎えの車を待っている間、孤児の赤毛のアンがマシューおじさんを待っているような、心細い気持ちでした。



## ジャック アンド ベティの家

『ジャック アンド ベティ』は私が高校時代に使っていた英語の教科書のタイトルで、私がホームステイをしたユダヤ系カナダ人、ホフマン夫妻の名前でもあります。

ユダヤ人集落、オーク通りにあるホフマン夫妻の家は、白い外壁の超モダンな造りで、玄関を入ると中央に螺旋状の階段がありました。

一階には応接間、ファミリールーム、ダイニングルーム、キッチン、マスターベッドルームにトイレ二つと風呂場があり、二階は寝室が三部屋で、十六歳のケン、十三歳のリリー、そして私用となっていました。トイレもお風呂も二つずつ、加えて洗濯場あり衣装箱ありと、映画で見るとなような豪邸でした。インド人のメイドが週五日来て洗濯、掃除、アイロンかけ、それに夕食の下ごしらえまでするので、私の家事手伝いはせいぜい食後のお皿を食器洗い機に入れるくらいのものでした。

社交家の夫妻はパーティーやブリッジに出かける夜が多く、私はよくリリーのお守りをし

ました。ケンはほとんど外出です。リリーと私はそれぞれ宿題を終えるとテレビを見てお風呂に入るのですが、その後が大変！リリーは将来美容師になりたいとかで、私をモデルにして髪をセットしてくれるのです。が、十三歳の女の子にきちんとしたヘアスタイルができるわけはありません。私は日本人特有の性質で「ノー」と言えず、仕方なく鏡の前に座ります。ピンクのカーラーにぐるぐると私の髪を巻きつけるのですが、前に後ろにとやたらと引つ張られ、ピンで強く留められて、私の目はつり上がったまま。ドライヤーのビニールハットをかぶせられ、四〇分くらいは忍の一字で、髪が乾くまで我慢させられるのです。その後、逆毛を立てて、ヘアスプレーでバリバリにセットされ、翌日は私の顔の二倍くらいの丸い頭になって、学校に行くという始末でした。

ご主人のジャックはシャツ製造業のオーナーで、会社はダウンタウンにありました。おかげで毎朝、リリー、私とジャックの弟は、彼の車で町まで送ってもらいます。私にとってはお抱え運転手つきの、贅沢な通学でした。

クリスマスが近づいたある夜。ふと目が覚めると、ベッドのそばに二メートル近い大男のケンが立っているのです。その時、私が声をあげたどうかは覚えていないのですが、ケンは

"I am sorry to scare you, Sachii." (怖がらせてごめん)と謝りました。

西洋では、ベッドルームのドアは寝ている間半開きにしておくのが普通です。私もリリーやケンにならって、寝るときはいつもドアを半開きにしていたのですが、この夜以来、ドアを堅く閉めて寝ることにしました。けれども夜中、目が覚めると閉めたはずのドアが開いていることがあります。私が勉強していると、ケンが前をはだけて入ってくるなど変なことが重なったので、身の危険を感じ、引越すことに決めました。

ケンは、お金持ちの家庭によくある問題児で、タバコ、酒、酔っ払い運転、スピード違反、停学、退学、転校を繰り返しており、一見理想的な家庭に見えるホフマン家は、日が経つにつれて、次々と問題があることが分かってきたのです。

夕食時は、両親とケンの間でしばしばけんかが始まるのですが、怒り狂ったケンの反抗は凄まじいものでした。私はどうしていいかわからず、ひそかに自室に引きこもるのです。

十二月二十四日。冬休みに入り、ホフマン一家はアメリカのシアトル（バンクーバーから車で約三時間）に住む親戚の家に、クリスマスのお祝いに出かけて行きました。この留守の間に次の家を探そうと思っていた矢先のことです。明け方の三時頃、ドアのベルが鳴り響き

ます。広い家には私一人。恐怖感に襲われながらも玄関へと下りていき「誰？」とドアを開ける前に聞くと、「ケンだ」と言います。開けるのを躊躇している私に、

「俺の家だから開けろ、開けろ！」

とドンドンと戸を叩いて怒鳴るのです。確かにここは彼の家。私はおそろおそろ玄関の戸を開けました。すると、ドヤドヤと四、五人の男の子が入ってきて、リビングルームに行き、アルコールを飲みながらビートルズのレコードでパーティが始まりました。男の子とはいっても十六歳ともなるともう立派な男性。中には二メートル近い大男もいるのです。私はチャックに電話で事情を話し、すぐ迎えにきてくれるよう頼みました。

それから、ベッドルームのドアを閉めて椅子でつかえ棒をし、彼らが入って来ないようにひたすら祈りました。いつ外に逃げ出しても寒くないよう、また襲われたときの用心に下着やセーターをたくさん着込んで、雪ダルマのようになってチャックを待ちました。父親を伴ってチャックが来るまでの一時間は、生きた心地がしませんでした。

ところが一難去ってまた一難、車が走り出した時、彼が、

「サチ、ドコヘイクノ」

と聞くのです！

私は当然、チャックの家に泊めてもらえるものと信じていたので、この問いにはびつくりしました。何故なら、二十五日には午前十一時から彼の家のクリスマスパーティーに招かれていたので、当然、夜明けまでの数時間、部屋の片隅にでも休ませてもらえるものとはかり思っていたのです。

自分の思いはずれに、私はすっかり動転してしまいました。個人主義が徹底しているカナダでは、そもそも、チャックを呼び出して助けを求めることが間違っているのです。人に迷惑をかけずに自分でタクシーを呼び、ホテルなりYWCAに行つて泊まるべきなのでしょう。私はすっかりチャックに甘えていたので、その様な手段が浮かんできるとはありますが、そんな。それに、ホテルとかYWCAに泊まったことが一度もないので、思いつきませんでした。

考えたあげく、最近友達になつたカナダ人と家庭を持つているパーカー敬子さんに電話をし、一泊させてもらう事になりました。敬子さんは快く引き受けてくださり、日本人の暖かい親切に私は安堵し、感謝と共に、この夜のことは強いショックとなつて、今でも心に残っています。

ホフマン一家がクリスマスホリデーから帰つて来るまでに、次のホームステイ先を見つけ

たかったのですが、クリスマス、お正月と重なったので、しばらくはバーナビーに住む友人、モニークの家の地下室のスイートに居候をさせてもらうことになりました。荷物だけを先にまとめて運んでおき、私はホフマン夫妻が帰ってくるのを待つて、引越すことにしました。四日間のホリデイを楽しんだ彼らは、晴れやかな顔をして帰ってきました。こんな時、いつ、どのように、引越しの話を持ち出したら良いのかタイミングが難しく、切り出せないままにその日は過ぎてしまいました。

翌朝、ベティが食卓で新聞を読んでいるとき、私は思い切って言いました。ケンが時々、夜中に私のベッドルームに入ってきたこと、クリスマスイブにお友達を連れて帰ってきたこと（両親はこのことは知りませんでした）……。だから、私は引越しをしたほうがいいと。ベティは大きな目をパチパチしばたいて、

「ちつとも知らなかった。私はケンがよくわからないの。あの子、今とてもいろんなことで迷っていて、可哀想だけど何もしてあげられないの。でもあなたが出て行きたいのだったらそうなさい」

と言いました。ベティは息子のトラブルに表情を曇らせながらも、

「それで、行き先は見つけたの？」

とやさしく尋ねてくれます。

「ありがとうございます。しばらくは友人の家に泊めてもらいます」

私はベティへのお礼にと、母が縫ってくれたウールの着物をプレゼントしました。

お別れの日、リリーにさようならを言うと、彼女はちらりと私を見て目をそらし、そっけない声でただひと言「bye」と言っただけ。ご主人のジャックとケンはそのとき家にいませんでした。



## モニークの家

フランス系カナディアンのモニークは、当時三十五歳くらいだったでしょうか。英仏語が堪能で、政府の仕事をしていました。モニークの家にはダブルベッドが一つだけなので、私

はモニークのそばにもぐり込んで眠ります。まるで、外人のお姉さんができたようです。彼女のふくよかな体のぬくもりが伝わってきて、気持ちよく眠りにつくことができました。

モニークの毎日は時計の針のように正確かつ几帳面で、私にとっては少々窮屈でしたが、居候の私は極力彼女のリズムに合わせました。

朝は一緒に起きてオートミールの朝食。あのドロツとした麦のおかゆにミルクとブラウンシュガーをかけて食べるのですが、私はとうとうある日吐き気をもよおしてしまいました。

それ以来、今もオートミールは食べられません。土曜日と日曜日は決まってパンケーキ。特大ホットケーキにたっぷりバターとシロップ、ジャムをつけます。朝から、おやつを食べているような気分でした。

また、食器は一日一回夕食後に洗うのです。それも、洗剤を入れた熱いお湯の中で汚れを落とし、そのままゆすがず、ざるに上げ泡だらけのまま、タオルで拭くのです。レタスは洗わず、そのままサラダに。りんごも梨も皮ごと丸かじり。週末は洗濯、掃除、そしてスーパーマーケットで一週間分の食料を買いだめます。このように、日本に比べると毎日が規則正しく計画されていて、ここでも新しい経験をしました。

私は学校から帰ると宿題を終え、日本へせっせと手紙を書きます。時々、家主のイタリア

ンのオッサンが、部屋の掃除とか、ドアの取っ手を取り替えるとか言つて、錆びた赤い道具箱を持つて入つて来ます。モニークが頼んでいるものとばかり思つていたのですが、ある日、このオッサンが変な気を起こして私に近づいてきたではありませんか！ 私は体重四十五キロの女忍者、くくのいち。ひらりと身をかわし、家具いっぱい部屋の物を逃げ回りました。思い起こせば、あまり機敏でもない私がよくぞ素早く大男をよけたものだ、女性本能がなせるわざであろうか、我ながら天晴れだと思ひました。

私を捕まえそこねたオッサンは、

「静かにしろ！ 俺の言うことを聞け。ここは俺の家だ。いつだつてお前を追い出すことができるんだぞ！」

煮て食おうと、焼いて食おうと俺の勝手、と言わんばかりです。この家で、第二の危機を逃れたものの、私は男性不信に陥りました。しょんぼりしてモニークを待っていると、彼女は私の姿を見たときに、

「幸、ビクターに気をつけて。私のいないときは、彼を部屋に入れないこと！」  
どうやら彼女も経験済みのようでした。

その頃日本では、「男はみんなオオカミよ」という、江利チエミの歌が流行していました。

でも、初対面のときから「この人はオオカミ」なんて相手を決めつけていては、恋も愛も芽生えないでしょう。いくら気をつけていても、外国では言葉のハンディー、文化や価値観の違いなどで、いつ何が起こるかわかりません。私が日本を出るとき、兄に外国では嫌なことにはつきりと「ノー」と言わないとだめだよ、と言われましたが、長年の習慣を一朝一夕に変えることは難しいものです。



## ビッキーとデニスの家

一九六四年二月に移ったホームステイ先は、ウクライナ系カナディアンのビッキーとその息子八歳のデニスの家庭で、イースト・バンクーバーにありました。ホフマン家に比べると質素な家ですが、虚構の家に惑わされぬよう慎重に選んだのです。

ご主人は材木の仕事で長期間山にこもり、めったに帰って来ないと聞いていました。シンガルマザー同様のビッキーは、スーパーマーケットで売る肉類の包装の仕事で、夕方四時半頃に家を出て、深夜に帰宅するという生活でした。

私はデニスと二人で、用意された夕食を食べ、デニスの宿題をみて（英語がわからないので、ただ宿題をしたかどうかを確かめるだけ）ベッドタイムまでのベビーシッター役を頼まれました。おいしい肉類がふんだんに食べられます。ビッキーの作るビーフシチューは絶品でした。

寝る前には、デニスに英語の本を読んであげるのが習慣でした。子どもの物語とはいえ、わからない英語だらけです。ある本に“nostril”という聞き慣れない言葉が頻繁に出てきました。デニスに聞くと、人差し指と中指の二本を、鼻の穴につっこんで、“nostril”と教えてくれたのです。この時の子豚のようなデニスの顔を思い出す度に一人で笑っています。彼と一緒に読んだ童話の数々が、私の英語上達の助けになったことは間違いありません。デニスと私はベッドルームを共有していました。八歳の育ち盛りの男の子は八時には寝て、朝起きると一人でリビングルームでテレビを観るので、眠りの浅い私ですが、安眠できました。でも可愛い弟のようなデニスと一緒に平和な日々も長くは続かなかったのです。ビッキー

の夫が失業して帰宅したため、私は必要のない人間となつてしまつたのです。今すぐとは言わないけれど、家が決まったら引越すようにと言われ、二ヶ月足らずでそこを去りました。



## ジムとダイの家

次の家庭は八歳、七歳、三歳と三人の子どもを持つ家庭でした。製薬会社勤務のご主人ジム・シャープと大きなお腹を抱えた奥さんのダイ・シャープで、YMCAの掲示板に出した私のメモを見てすぐ電話をくれたのです。

シャープ家は、ブリティッシュ・コロンビア大学の近くで桜並木の住宅街にあります。チョコレート色と白いペンキの調和がとれた五寝室の三階建ての家です。奥さんの実家、ランカスター家は、イギリス王室の侍従を勤めた先祖の末裔で、由緒ある銀食器のデイナーセット

他、数々の銀の器が食器棚にかざられています。

ジムはセールスマンで出張が多く、ダイのお母さん、ミセス・ランカスターがベビーシッターとアイロンかけを手伝い、私は、皿洗い、掃除、料理の手伝いと、今までとは比較にならないほど忙しくなりましたが、三人の子どもにもまつわりつかれて、嬉しい悲鳴をあげたのでした。

そして五月に赤ちゃんが生まれました。ジムとダイは男の子が欲しかったので、名前を「Mathew」と決めていました。私は「th」の発音ができないので、「Mathew Mathew」と練習していました。けれども、生まれたのは女の子で、両親はあわてて「Susan」と名づけました。スーザンは日本式にはスキチャンかな。スキは「like」とか「lovable」という意味で、チャンは小さな子を呼ぶときにつけるのだと説明したら、スキ、スキ、スキ、これはいい名前だ、スキにしようということになり、スーザンの名前は正式にスキとなりました。

日本の母からお祝いに『こんにちは赤ちゃん』のレコードが送られてきました。シャープ家では、このレコードを始終聞き、子どもたちは「コンニチワ、アカチャン、ワタシガママヨ」と歌えるようになったのでした。私はダイから、おむつの替え方、ゲップの出し方、赤ん坊の抱き方、ミルクの飲ませ方など西洋式育児法を教えてもらいました。

私がステイを始めてから、シャープ家は日本ファンになり、食事中テーブルを囲んでは、日本についてよく質問を受けました。私は時々日本食を作りましたが、中でもスキヤキは好評で、以来、お客を呼ぶときは「幸のスキヤキ」とメニューが決まったのでした。私は一緒に彼らの仲間に入れてもらい、会話を楽しみ、自然とテーブルマナーが身につきました。

ある日、友人が作ってくれた散らし寿司の半分を大事に冷蔵庫に置いておいたら、ダイが、「ああ、あのフライドライス？ 温めてランチに食べちゃったわ。とってもおいしかった！」彼女にとっては、散らし寿司もチャーハンも同じなわけです。

シャープ家にはスイミングプールがあり、私はその夏はプールサイドで大いにカナダの夏を楽しませてもらいました。

カナダを離れる日、シャープ家で最後の食事をしていると、長女のジュディが、「どうして幸はずっとここにいないの？」

と突然泣き出しました。お父さんのジムが、

「幸は、お母さんに会いたくなっただよ。ジュディだって、長い間ママに会っていないかったら、会いたいだろう？」  
となぐさめます。

おませな次女のリサは私に、ジュディが泣いたら、私がめんどろをみるから。ジュディのことはまかせておいて、と言います。無口な長男のダニー、そして生まれて三ヶ月のスキ、私は悲喜こもごもの思いでシャープ家に、そしてバンクーバーに別れを告げました。

シャープ家には後年、私の長女、リサが大学時代にホームステイをさせてもらい、親子二代に渡ってお世話になりました。ジムとダイは四人の子育てを終えて、同じ場所に家を改築して、今は二人静かに暮らしています。五人の孫、一人のひ孫にかこまれて、幸せなご夫婦です。



## サイプレス・パーク・ティールーム

一方チャックは、夢だった貿易会社設立のプランをねりながらティールームの仕事をしていました。毎日身を粉にして働くのですが、忙しいばかりで先が見えません。新装のサイプ

レス・パーク・テイールームは、ウエストバンクーバーの静かな住宅地にあり、閑古鳥が鳴いていました。それもそのはず、モールはわずか六店舗、雑貨や、ドラッグストア、美容院などの小さな店があるだけ。周りは人影の少ない高級住宅街です。よほどのことがないかぎり、街から四〇分もかかる喫茶店にやってくる人はいません。近所に住んでいる人は買物、食事は街に出かけて行きます。客層のほとんどが、道路工夫、配水管工、大工、警官、消防員、フェリドックの技師といった作業着の男たちでした。たまに近所の有閑マダムが散歩の帰りに一休みしてゴシップに花を咲かせています。

その頃、日本では、ジャズ喫茶、シャンソン喫茶、歌声喫茶、クラシック音楽喫茶など、音楽喫茶が流行していました。チャックは演歌が好きで、美空ひばりや三波春夫のレコードを買っていましたから、演歌喫茶でも始めたかったでしょう。内装も日本風にする予定だったのですが、キッチン用品、テーブル、イス、食器を揃えるだけでもかなりの資金がかかったそうです。また、日本風な内装に必要な民芸品店は皆無です。レコードプレイヤーを買い、お金も尽き、ラジオで地元の放送を流すしかありません。天井が高く、木材を使った喫茶店は音が響くので、民芸風な演歌喫茶店にしたなら、日本では受けたでしょうが、イギリス系の住民が占めるウエストバンクーバーでは、夢のまた夢でした。コーヒー一杯二五セント(当

時の日本円で八〇円ぐらい)で、お代わりは何杯でもただです。五〇セントに値上げしたら、お客ががたりと減ったそうです。日本のコーヒーは二百円、三百円はしたと思います。

私はその店を手伝うこともなく、ホームステイ先から英語学校に通い、チャックの暇な時に会うのですが、働き手はチャック一人、見るに見かねて家族が時々手伝っていました。私は二時間かけて、そこに行つてもじつと座つてコーヒーを飲みながら、チャックが店を閉めるまで待つていたのでした。

チャックにはガールフレンドがなく、私がバンクーバーに来たことをとてもエキサイティングだと喜んでくれました。日曜以外は、閉店後の六時から会っていました。チャックの友達や妹たちと、定員オーバーの車にぎっしり乗つて、アメリカまでビールを飲みに行ったものです。カナダの法律では、アルコールのサービスは夜十二時までなので、若者は国境を越えてアメリカの飲み屋に移動するのです。

ボイスカウト所有のヨットに乗せてもらい、寒さと船酔いとトイレを我慢しながら、意識もうろう状態でのクルージング、道なき道の山のぼりなど、日本では到底味わえない苦しみながらも楽しい日々です。英語学校とホームステイのおかげで英語は少しずつ上達し、日常の会話が出来るようになりました。それでもすべてをチャックに頼っており、いつも彼と

一緒でないと不安でした。

月日は飛ぶように早く、バンクーバーで生活し始めて一年となりました。二人の関係は、チャックの母親の反対と、始めたばかりのティールームの仕事の忙しさもあり、なかなか先が見えません。

私は日本を離れるとき、ひそかに自分の運命をチャックにかけてたのです。とにかくカナダに行こう。

そして、「自分の行動には責任を持ちなさい」という母からはなむけの言葉が思い出され、将来の方向を決める時だと思いました。私達は愛し合っている、それだけで十分なはずなのに、私はチャックの私への愛情の確信が欲しかったので、かなりしつこく問いました。

それに私は、二十六歳の婚期がおくれたオールドミス、外国帰り、被爆者という結婚に不ぞろいな条件を考えると、怖れと不安がつります。

チャックは学生時代に広島原爆ドームを訪れ、原爆に対する一応の知識はもっています。私が被爆者であることは伝えましたが、彼にとってそれは特別な問題ではないのです。これは私にとって大きな救いです。

チャックが、

「婚約しよう！」

とポツリといました。

そうです。若くて夢ばかり大きい二人にとって、婚約が最大の結びでした。

ある夜、チャックはバンクーバーを全望できるサイプレス山の展望台に連れて行ってくれました。そこから見える夜景はそれは見事なもので、とても言葉に表わせません。太平洋につながる湾にはたくさんさんの船が浮かび、その夜景はサファイア、ダイヤモンド、エメラルド、トパーズと無数の宝石の光が輝いているようです。

山頂は風が吹いて、冷たい空気に思わず、

「さむい」

と首をすくめました。チャックが私の肩を両手で囲み、

「僕の愛で温めてあげるよ」

「二人で一緒だと、あったかい」

「そうだよ。いつの日か暖かい愛の巣をつくらうね」

「いつ、いつ私達結婚できるの？」

沈黙がしばらく続きます。彼は話をそらせて、

「婚約指輪は、幸の気に入った指輪を買おう」

私は夜景の美しさに感激していたので、

「指輪はなくてもいいの。ここにすれば、宝石箱に入りきれない宝石があるもの。これ、みんな私のもの。それより早く結婚したいわ」

「僕も……。でももう少し待ってくれよ。明日、婚約指輪を買いに行こう」

「お母さんが反対しているから、結婚できないの？」

「それも一つの理由だけど、今の僕には結婚して妻を養っていける経済力がないんだよ。ごめんね」

「わたし、働くわ。日本に帰って、働きながらあなたを待ってようかな」

私はチャックがティールーム開店のために、銀行にかなり借金をしていると聞いていた。なので、指輪を貰うのをためらい、結婚が直ぐに出来ないことも、納得がいきました。

でも私は秋風に吹かれているような寂しさをおぼえ、今、考えるのはよそう。何とかなさりと自分に言い聞かせ、美しい夜景に心を移しました。



## 今日は指輪を買う日

私は宝石店に入るのはこの時が初めてです。店員はかなり年配の男性。チャックがダイヤモンドの婚約指輪が見たいというと、黒いビロードを張った小さなお盆の上に、数個の指輪を並べて見せてくれました。予算を聞かれ、チャックは私の気に入ったのはどれかと聞きま  
す。高価な指輪を前にして、私は判断に迷いました。

いちばん小さいものを選ぶと、チャックはこっちはどう、と大きいものを指します。私  
手が小さいから、それは大きすぎると思いました。店員は、

「では、これでどうでしょう」

と、二人で選んだ指輪の中間を取って選んでくれました。そして指のサイズをはかり、数日  
後にできあがるということでした。

日本では、ダイヤモンドなど見たこともない生活でした。普通、指輪というと誕生石。結  
婚指輪は一般にはかまぼこ型という何の飾りも無い金の輪の指輪だったのでないでしょう

か。その頃は独身の女性は指輪など、あまりはめていませんでした。きらきら光るダイヤモンドが私の指にはまる目を想像すると、喜びよりも恐ろしくなります。はめるのが恥ずかしいな、もしや、泥棒に取られたらどうしよう、失くしたらどうしよう、チャックと別れてホストの家に帰る途中、そんなことを考えていました。

とてつもないことが起こると、いつも私は放心状態になってしまいます。もらった婚約指輪は結婚指輪とともに五〇年近い歳月を経て、私たちの人生の浮き沈みを共にしながら、今も私の指に輝いています。その婚約指輪を見た近所の小学六年生の女の子が、

「幸、あなた、本当に結婚するの」と聞きます。

「そうよ」

と答えると、私をしげしげと見おろして（彼女は私よりも身長が高かったのです）、

「幸、結婚するには若すぎるんじゃないの」

と言います。彼女には一五三センチの私は、小学生にみえたのでしよう。

後日談ですが、チャックはどうしても婚約指輪にこだわり、また宝石店に出向いて、自分の気に入ったのと取り替えたそうです。そのとき、店員は、

「長年この商売をやっているけど、あなたのフィアンセのように、小さいダイヤが良いと言  
う人には会ったことがないね。なんて控えめな女性でしょう。大切にしなさいよ」  
と言ったそうです。



## 二人を阻む人種差別

チャックと私は婚約までこぎつけましたが、結婚できる見通しは立ちません。二十六歳になつた私は、婚期が遅れることに焦りが出ていましたが、チャックはまだ二十四歳ですから結婚を急いではありません。それに経営しているティールームの借金を抱え、両親の家に居候をしています。カナダでは十八歳になると親の元を離れ、独立するのが当たり前なのです。

また、両親が両手を挙げて、二人の結婚を賛成していませんから、行く手はふさがれてい

ます。

当時、バンクーバーでは東部トロントと比べると黒人はほとんど住んでおらず、代わりに中国人、日本人など東洋からの移民が、鉄道や道路工事、漁師等の重労働をしていました。ランメル家が住んでいたウエストバンクーバーは、「ブリティッシュ・プロパティ」と言って、ギネスブックのギネスが個人で建造した、バンクーバーの名物ライオンズ・ゲート・ブリッジを越えた地区に、殆どアングロサクソン系が住んでいました。ですから「東洋人には土地を売らない」という法律があったほどです。その法律は戦後廃止されましたが、現在に至っても、住民の多くは白人がしています。

チャックの母、マーガレットはアメリカ生まれですが、両親はイギリス人、スコットランド人でした。当時の社会では黒人はニッギー、日本人はジャップ、中国人はチンク、先住民はレッド・スキンズと呼ばれ、白人と区別されていました。（または下等な人間のイメージがありました。）

チャックの母は、普通の結婚生活でもいろんな問題が起こって当然なのに、その上、宗教は違う、人種も違う者同志の結婚は、当時の社会風潮の中で、うまく生活できるのかと心配したのでした。

チャックに、

「お母さんは私のことどう思っているのかしら」と尋ねると、

「Sachi is ambitious」と言っているよ」

と返事が返ってきました。それを聞いた私は「そうか、クラーク博士の“Boys be ambitious!”(少年よ大志を抱け)と同じ言葉だけど、これはきっと“野心家”という意味で、日本人のくせに西洋人と結婚したがつている、という意味なんだわ」と解釈してしまいました。

異国では言葉がはつきり通じないので、日常生活では想像力と勘を働かせて物事を判断します。チャックの母への疑心暗鬼は、誇大妄想となり、彼女と会うのが恐くなり、彼女の前で私は卑屈でおどおどしていたように思います。

ある土曜日の午後、二時間以上バスを乗り継いでチャックが経営するサイプレス・パーク・ティールームへ行きました。お店の中に入るとチャックはおらず、チャックの母が一人で店番をしていました。私の顔を見ると彼女は、

「あら、チャックはさつき幸の家に行きましたよ。あなた達いったい何語で話したの?」  
と言つて笑いました。私はまた二時間かけて帰るより、ここでチャックを待とうと、ティー

ルームの隅に腰かけさせてもらい、チャックの帰りを待ちました。

こんな状況が続き、初め三ヶ月の予定だった私のバンクーバー滞在は一年半となり、里心もついてきたので、一旦日本に帰ろうと決めました。そのことをチャックに話すと、彼は私の顔をまじまじと見て、

「僕も行く」

と言い出したのです。

「ティールームはどうするの」

「やめるよ」

と以外にもあっさりと、店をたたむといえます。『石の上にも三年』のことわざがあるのに……と思いましたが、それよりも一緒に日本にきてくれるとは願ってもない喜びです。

チャックは一人で経験のないティールームを始めたのですが、思ったより大変な仕事で、なかなか利益があがらず、計画していた日本とカナダの貿易会社の設立は全く見通しがつきません。それにしてもいさぎよく廃業したものです。婚約のことも、日本に再度行くこともチャックの両親には事後承諾です。こうした一連のなりゆきを彼らがどう思ったのかはわかりません。

せつかく帰ってきた息子が三年も経たないで、また日本に行ってしまうのです。今思うと、チャックの母は、愛する息子が人種の違う女性と結婚することが、心底心配だったのです。

帰国もまた貨物船です。チャックの母がチャックの日本行きの荷物を停泊している船に運んできた時、船室のドアに書いてある客の名まえを調べ、Charles RummelとSachi Koumuraの部屋が別々に離れているのを見つけて、Very Goodと私に笑顔を向けてくれました。チャックはその時キャンプに行っていたのです。

『人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。』

箴言 二十九章二十五節



## 山姫丸に乗り移れ

出航の汽笛が鳴り、荷積みを終えた山姫丸は、予定より一日早くバンクーバー港を出航しました。この船は私が以前勤めていた新日本汽船会社の貨物船です。途中、ブリティッシュコロンビア州のプリンスルーパー港で再び荷積みをし、そこからはノンストップで二週間で横浜港に到着します。

チャックも一緒に乗ることになっていたのですが、彼はウイスラー山に友達と最後のキャンプに出かけていました。連絡も取れず、チャックを残したまま山姫丸はバンクーバー港を出航。私は船長にすがりついて、

「お願いですから、待つてください。チャックを置いて行かないで……！」  
と何度も頼みました。

でも貨物船を港にとめるには莫大なお金がかかるそうで、荷積みが終わると即刻出航するのだそうです。

「あなたのフィアンセ一人のために待つてなんかいられないよ。旅行の前にキャンプに行くなんて、馬鹿げたことをして」

と断られました。あきらめるしかありません。慌てて日本の母に最後の手紙を書きました。

「もうすぐ船が出航します。これがカナダからの最後の手紙です。チャックは船に乗り遅れたので、横浜港には私一人で着きます。彼は飛行機で行くので、私よりも早く日本に着くでしょう。その時は借りてもらっているアパートに案内してください。家族に会える日を楽しみにしています」

母はチャックのために六畳一間のアパートを用意してくれていたのです。

山姫丸はお姫様のイメージにはほど遠く、錆びかかった三千三百トンの貨物船です。それでも客室が十部屋ほどあり、留学生など数人の旅行者が乗っていました。船長さんと一緒にする食事は毎回おいしいのですが、私はチャックのことが心配でまったく食欲は無く、船室にひきこもっていました。

「本当に馬鹿な人。こんな時キャンプに行くなんて」

二人仲良く家族の前に姿を現す夢は破れ、「ちゃんと飛行機の切符が買えるかしら、船賃は払い戻しがきくのかな……」、などの思いがわいて安眠できません。そんな時、船長さんに呼

ばれました。

「もしかしたら、今夜チャックが来るかもしれないぞ」

「まさか！ 信じられません。どうしてここまで来れるのですか？」

船長さんは言います。

「果報は寝て待て、と言うだろう。楽しみにしていなさい」

私は甲板に出て真つ暗闇の海を見ていました。しばらくすると、遠くに小さなともし火のような明かりが一つ見えます。そのうち、キャプテン、船客、乗組員が出てきて一緒に暗闇を見ながら、雑談です。

「もしチャックがきたら、夜をあかしてみなで歓迎パーティーをしよう」

と誰かが言いました。私は、

「ジョニーウオーカーのウイスキーがあるから、それを開けるわ」

と、大金をはたいてお土産に買ったウイスキーを、皆で飲むことにしました。たぶんその頃、黒のジョニーウオーカーは二〜三万円したでしょう。でも本当に来れるのだろうか！

遠くにみえる小さな明かりはパイロット（水先案内人）が乗った船です。その明かりは次第に山姫丸を指して近づいて来ますが、まわりは暗くて何も見えません。やがて山姫丸の

真下に着きました。かなり波が強いようで、パイロットボートは止まっているのに上下に大きく揺れています。やがて縄はしごが山姫丸の船体から降ろされました。

上から見ると、カンテラの光の中に、なんとチャックがいるではありませんか！ ああ、彼は本当に来たのだ！ と思う間もなく、彼は突然その縄はしごに、サーカスのように飛び移りました。船上からワアー！ という歓声が上がりました。チャックはするすると縄はしごをよじ登って無事乗船。間に合った！ 最後の最後に、忍者のごとく現れたのでした。

「さあ、今夜は徹夜でパーティーだ！」

二週間の船旅の時間は余るほどあります。チャックはビールを片手に、ここまでたどり着くまでの冒険談を皆の前で始めました。以下彼の話です。

山姫丸が出航してしまったので、船会社に電話すると、「プリンスルーパートで荷積みをしているから、そこに一日で行くように」と言われました。けれどもバンクナーバーからプリンスルーパートまでの距離は千五百キロもあります。小型飛行機を二度乗り継ぐと出航までにとどり着けることがわかりました。幸いバンクナーバーから中間地点のテラスへ行くプロペラ機のチケットと、そこからプリンスルーパートまでの水上飛行機のチケットの購入ができました。しかし勇んで乗った飛行機の出発が大幅に遅れたため、テラスに着いた時には水上飛

行機は離陸した後だったのです。がらんとした待合室で途方に促されていると、偶然にしてはできすぎる幸運が待っていました。そこに高校時代の友人、ステイブがいたのです。

「やあ、しばらく。こんな田舎で会うなんて奇遇だな！」

彼は友人を見送ったところでした。事情を聞いたステイブは、

「俺がプリンスルーパーの港まで送っていくよ」

と助け船ならぬ車を出してくれたのです。

彼の古いスポーツカーは助手席のドアが壊れているので、開かぬようにしっかりと取っ手を握り締めているように言われました。百キロ余りのくねくねと曲がった砂埃の道路を、野越え山越えフルスピードで走りました。しかし、たどり着いたプリンスルーパーの港でもさらに悲劇が！

時すでに遅く、山姫丸はすでに出航した後だったのです。次に取った対策はパイロットに交渉して、一般人は乗れない規則のパイロットボートに乗せてもらうことでした。シー・スカウトの時、海では自分たちで造ったヨットを乗り回し、船、海共に熟知していること、はるばるバンクーバーから来たこと、これが最後のチャンスであることなどを説明して やつとOKが取れたのでした。

けれども最後の難関はパイロットボートの小船から山姫丸に乗り移る時です。パイロットが言いました。

「船の揺れるリズムをよく見て、タイミングをとらえろよ。ボートが波に乗って高く上がった瞬間を見計らって山姫丸のロープに飛び移るんだ。チャンスは一度きり。海におちたら命は無いぜ！」

練習なしの命がけの挑戦ですが、恐いと考える暇はありません。手荷物とリュックサックはあきらめてパイロットボートに残し、身一つになってタイミングを待ちました。時は一九六四年九月の夜中、

「今だ、ジャンプ！」

「セーフ！」

「よかった！」

「さあ、もう一度乾杯！」

パーティーは夜を徹して続きました。

第五部  
結婚・出産・子育て



徳川無声(左)と中村メイコ(右)の媒酌によるテレビ結婚式。(1965年)



## テレビ結婚

一九六五年九月七日。チャック二十五歳と、幸二十七歳は、フジテレビのテレビ番組、『ここに幸あれ』で結婚式を挙げました。

媒酌人は徳川夢声、中村メイコ。とても人気のある番組で、時の話題の人や特殊な趣味を持つている人、トクダネのある人などが選ばれます。私たちは、チャックがカナダ人で、私  
が広島出身の被爆者ということがポイントでした。出場カップルは番組から、挙式費用、結  
婚写真を、スポンサーの花王石鹸から、洗濯機と一年分の洗剤がもらえます。その上、新婚  
旅行の費用として五万円、出席者への引き出物は花王石鹸の製品でした。私たちは挙式のお  
金が無かったので、とても有難い話でした。結婚式は、仏教、キリスト教に関係なく、結婚  
の誓いの言葉は、視聴者の前で行われます。

二人のストーリーを紹介するシーンでは、私が被爆者ということと広島ロケとなり、原爆  
ドーム、平和公園を中心に行われました。原爆で亡くなった父と叔母の墓参りと、結婚の報

告という設定でした。原爆慰霊碑の前に立って、チャック、母みさを、私は手を合わせました。水を求め、あえぎ、苦しんで死んでいった人たち、遺骨が見つからないままの人たちを弔ってあります。その中に、愛子叔母と、進藤家の親戚数人も眠っています。原爆慰霊碑には、『安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから』と刻まれています。これは、世界平和を希求するヒロシマの心です。

その時、私の脳裏に、原爆の思い出が蘇ってきました。手を合わせて、慰霊碑に眠っていらっしやる人々の霊に祈っていると、こうして結婚できる自分の喜びが、かき消されていくような思いに変わり、涙の祈りとなりました。

みさを母はチャックを家に迎える日を不安と期待で待っていました。ロケが終わり、私達は高須の家に行きました。案内された部屋に荷物を置くと母は

「暑かったでしょう、まずひと風呂浴びてください」と言ってチャックを迎えました。

夕食の時、母は食卓に鮎の塩焼き、とうがんのくず煮、お刺身、なまこの酢の物などを並べると、うちわでチャックに風を送ります。チャックは浴衣に着替え、ビールを片手にすっかりくつろいでいます。

「お口に合いますかしら」

「ウーン、トテモオイシイデス。ガツガツタバマシタ」

「チャックさんは浴衣がよく似合いますね。それは幸のお父さんの浴衣なんです。あなたにあげましょう」

「ホントデスカ、ワルイデスネ、デモウレシイデス」

チャックは私の耳元でささやきます。

「スゴイシンセツネ。サチトオカアサン、ドッチガワイフカワカラナイ」

母は相変らずうちわで風を送りながら微笑んでいます。

「オカアサンハ、タバナイノデスカ」

「チャックさんに、お母さんと呼ばれてとてもうれしいわ。ありがとう」  
母は涙ぐんでいたようでした。



## 二人の新居

広島でのロケーションから東京に帰ってみると、チャックの父から電報が届いています。父と姉夫婦が結婚式に出席するというのです。

大喜びで受け取るはずの電報ですが、チャックは、困った困ったと頭をかかえています。結婚が決まった時、両親の承諾を得るために、彼は「仕事は二つかけもちで、収入は妻を迎えて充分生活できる。家は一軒家で、ベッド、テレビ、家具一式そろっている」と電話で言ったのです。父は「それなら安心だ。おめでとう」と快く賛成してくれたのだそうです。

ところが実際に住んでいるのは、家賃五千円、六畳一間に、一メートル四方の台所が付いているだけの長屋のようなアパート。風呂なし、トイレは水洗ではなく、おまけに共同です。ベッドも無く畳に布団を敷いて寝るのです。父に大ボラを吹いてしまったものの、まさかはるばるカナダから結婚式に出席するとは、夢にも思っていなかったと言うチャック。式まですわすわ二週間。さあ大変、どうしましょう。

まず家探しです。幸い新高円寺の地下鉄の駅から一分のところに理想的な家が見つかりま

した。昔は旅館だったとかで、千坪の敷地に、母屋、築山、池があります。くぐり戸があり、そこを抜けた離れに、新婚夫婦用に建てられたレンガ造りのモダンな洋式の家があったのです。しかし、数年空き家になっていたのでペンキは剥げ落ち、まわりは草ぼうぼう。それでも家賃は三万円です。決めるしかありません。

私は友達四人に手伝ってもらい、雑草を抜き、苔の生えている池をたわしでこすって新鮮な水を張り、金魚を放ちました。空き地に花を植えて、見違えるようにきれいになりました。その間は、藪蚊にさされ、汗だくだくの重労働。チャックは仕事の合間に家中のペンキ塗りをするので、それはもう大変でした。

母が高島屋でベッドを買ってくれ、その他、家庭用品を取り揃え、全部まとめて一度に配達してもらい、お式の数日前にはすべてが整ったのでした。母には感謝してもしきれません。チャックは徹夜で最後にペンキの二度塗りを終えて、翌日何食わぬ顔で父を羽田に迎えに行き、新居に案内しました。冷蔵庫は高くて買えませんでした。チャックの父が東芝の営業用の大きなのを祝いに買ってくれました。「災い転じて福となる」です。このようにして、チャックの父フレッドのおかげで、私は立派な一軒家にチャックの花嫁として迎えられたのです。

フレッドは、ドイツ人の父、デンマーク人の母の間に一九〇八年カナダで生まれました。海が好きで、大工でしたから、水の見える海か湖の前に家を建てては移り住んでいました。リタイアしてから移ったバンクーバー島の家では、膀胱ガンのため病床にありました。

私は余命いくばくもないと宣言された一九九一年の夏、フレッドを見舞いに、バンクーバー島にいきました。その時、義母マーガレットが裏庭に丹精して育てた大輪のダリアの花を切つて、海の見える寝室に飾りました。フレッドはとても喜んでくれました。

「Sachi, thank you for coming, God bless you(幸、見舞ってくれて有難う。貴女の上に神の祝福がありますように)」。

別れる時、フレッドはそう言って私に手を差し伸べてくれました。私がフレッドと初めて会った日から三〇年後に頂いたこの最後の言葉 “God bless you.” の通り、私は日々、神様からあふれんばかりの祝福をいただいています。

フレッドは一九九一年十月十二日、長男 チャックと、三人の娘(エミリー、ドロシー、サリー)に見守られて昇天しました。私とチャックの新居の秘密は、フレッドには知られぬままとなりました。



Mrs. Rummel ヌヂル

日本で結婚して、新婚旅行は横浜から船でナホトカに着き、ソ連、モンゴル、チェコ、ユーゴスラビアを経て、ヨーロッパでは約八カ国の旅をして、アイスランド、ニューヨーク、カナダへ。(この行程が一番安上がりの飛行機代だったのです。)そしてモントリオールで姉夫婦と落ち合い、東から西のバンクーバーまでは姉の車でカナダ横断をしました。

ヨーロッパでの旅行は、殆どお金をかけないで、陸地の乗り物は当時日本ではあまりなかった「ピッチハイク」という、行き当たりばったりで到る所で他人の車に乗せてもらいながら目的地に向かって行く方法でした。その車を獲得する役割は私で、片腕をのぼし、親指だけ立て、手を握ったままで道路の脇に立つて車が来るのを待ちます。はじめは恥ずかしく勇気がいりましたが、慣れてくるとどんな車に乗れるか楽しみになりました。

空席がある車は、私を見て、乗せてやろうと止まります。するとやおらチャックが後ろから大きなリュックサックを抱えて出てきて、目的地を告げ、一人しか空席がない時でも、強

引に車に入って私をひざの上に乗せ、レッツ・ゴーと運転手に号令をかけます。宿泊は殆どがユースホステルか大学の学生寮です。夏でしたから、ある時は星空の下でごろ寝。その日、どこまで行けて、どこを観光するのか、全く無計画の旅行です。これはハネムーンとは程遠く、無銭旅行にちかいです。母はよく生きて帰ったねと感心しますし、私はあきれながらも、よくついていったものだと思っていました。確か当時のお金で二人で、約百万円かかったのではとおもいます。そのための費用はチャックが猛烈に働き、私も節約をためたのです。この新婚旅行は 結婚して二年目でした。結婚にともなう新婚旅行は沖繩でしたが、台風が来て飛行機がキャンセルになり、義父もカナダから来ていたので、中止となったのです。

さてバンクーバーが近づくにつれ、私はチャックの母との対面が恐くなり、車の中でそわそわし始めました。するとチャックの姉のエミリーが、

「幸、母はね、貴女は好きなのよ。でも結婚生活はいろいろたいへんで、うまくいかないカプルが多いでしょ。まして、国が違い習慣が違くと、普通以上に問題が起こるのではと心配しているのよ、父は “Sachi is cute、(幸は可愛く) してらっしゃるわよ。Don't Worry! (心配しなごで)」

と言つてくれます。

二ヶ月にわたる横浜港発の旅の終点は、バンクーバーのチャックの実家です。嫁として迎えられるでしょうか。

チャックの母 Mrs. Rummel、そして嫁の私 Mrs. Rummel の対面です。私は髪の毛をとかし、化粧直しをして車から降りました。

「Hi! Hello! Welcome Back! How are you?»

二十名ぐらゐの家族、親戚、友達の英語が飛び交い、小さい私にもみくちゃにされながら、歓迎のキッスとハグ、握手をうけます。チャックの両親の家はさるすべりの木の向こうに太平洋がひろがって、回りは巨大な岩の断層が波に洗われて、角が取れて歩きやすくなっています。その先に小石が敷きつめられたような海岸が続いています。穏やかな夏の日です。空気は澄みに澄んでいて、透명한空間にナイフを入ると、バシッ! と音がしそうな感じがします。波の音もなく、すべて静まり返っている中で、家族のはしゃいだおしゃべりの声がひびきます。荷物などそつちのけで、まずはベランダの椅子に座って乾杯です。義母が

「幸、見て、ほら、ハミングバードが来てる」

彼女の指差すほうに目をやると、両親のベッドルームの軒下につるしてある砂糖水の瓶を

目当てに、ハミングバードが砂糖水を飲んでいました。はじめて見るちっちゃな昆虫のような鳥、飛んでいる時その羽が音をたてるので、ハミングバードと言うのだと説明してくれました。

「今日はフレッドが釣ってきたサーモンのバーベキューよ」

私が義母、マーガレットに

「何か手伝いましょうか」

と言うと

「幸はお客様だから、ゆっくりして。それよりもチャックと幸に会いに来てくれた人達と話してちょうだい。彼らはあなたたちに何時も会えないんだから」

と言われるので、私はみんなの輪の中に入って、チャックのそばにすわり彼の話を聞きました。

デザートは義母が手づくりのアップルパイとルーバーパイです。どちらもチャックの好物です。そのパイの上に、たっぷりアイスクリーム、またはチーズをのせて食べます。皆さん、よく食べて、飲んで、笑って、しゃべる陽気な家族です。せめて後片づけは手伝おうと、食卓の食器をかたづけしていると、マーガレットが、

「幸、このうちではね、私がボスなの。貴女は私の言うことを聞きなさい。手伝わないでと言ったでしょ。さあ、皆の所に行きなさい。」

と台所から追い出されました。そこでは義父が茶碗をあらっています。日本だったらどうでしょう。嫁は何時も台所にいて、料理を作り、後片付けをするのが当然ですのに。

美しい夕日が沈み、キャンドルが灯されて、害虫除けのランプもつきました。温度が急にさがります。みんなカーディガン、ショール、毛布に包まって、夜の更けるのも忘れての楽しい集いでした。

全く、姉エミリーの言葉どおり、チャックの両親は、私をランメル家の家族の一員として、暖かく迎えてくれました。約一ヶ月の滞在でしたが、私にとっては、チャックの家族、親戚を知る機会に恵まれ、すべてが新鮮です。マーガレットは私を嫁というよりも、チャックのワイフとして、接してくれます。

ある日、マーガレットは私に聞きました。

「幸、明日何か予定がありますか」

「いいえべつに」

「じゃ、半日、チャックを借りていいかしら、垣根を直したいから、フレッドがチャックに

手伝ってもらいたいといっているの」

私は、自分の息子なんだから私を通さなくてもいいのに、でも私の存在を認めてもらい感激でした。ランメル家では小さなことでも家族それぞれが夫婦単位で行動します。

またある時は、チャックが熱を出して寝ていると、元看護婦のマーガレットは私に体温計を渡して、

「幸、熱を測ってきて」

と言います。私が

「マーガレット、チャックの様子を見て、あなたが熱を測ってください」と言うと、にっこりと笑って寝室の前に行く、

「入ってもいいですか」

と私に聞きます。このように息子の嫁にワイフとしての主導権をあたえてくれます。私は嫁としてつつましく、へりくだり、「はい、はい」と姑の言うことに従う必要はなく、それよりも物事を判断する時は、はつきりと自分の意見を言うのがよいのです。「お任せします」と言う日本では大変便利な言葉は禁句です。こうなると、嫁、姑の基準が解らなくなり、困惑しました。

私は義母をマーガレット、義父をフレッドと呼ぶことになんかの抵抗がありました。けれどもそれは彼らの希望です。私が日本流に「おかあさま」と呼ぶと、私は貴女の母ではないから、マーガレットと呼んでちょうだいというのです。

そういえば、カナダには親子でも、親を名前で呼ぶ子どもがいます。日本のように○○さん、とは呼ばず、すべて呼び捨てなのも、慣れるまで命令調に聞こえます。とくに年下の子どもから「幸」と呼ばれるのは、あまりいい気持ちではありませんでした。

結婚以来十年間は、日本に住んで夏休みになるとカナダに帰国していました。そしてある年はヒサコ母、ある年はみさを母も一緒にきました。

ヒサコ母は卓球が好きです。チャックの叔父と卓球試合をして、母が負けた時、マーガレットは私に

「ジョージはね、大使になれないわ。真剣勝負をしてね、外国のお客さんを負かして、しかも女性を」

母は卓球には自信があったので、くやしいらしく、

「ジョージ あなた、何歳」

と聞いたそうで、

「僕六十五歳」。

母はジョージよりも三歳年下でした。

サケ釣りに連れて行ってもらい、小さなサケを一匹釣ったことがあります。チャックの両親が行くところ、買物、友達の家でのティーパーティー、農家に野菜や卵を買いに行くなど、日常の生活を共にさせてもらい、日本と違ったものを見つけると、母にとってはとても珍しくて、喜んでいました。

みさを母はフレッドが岩場に養殖した牡蠣を、ねじ回しでこじ開けて中身を出し、海水で洗って食べるのが楽しみで、毎日のように一つ二つ口に入れていました。のどを通る時のつるりとした感触がなんとも言えずおいしいのだそうです。そして太平洋の波を枕に昼寝ができた



チャック一族。中列右から3番目がチャック。前列左端が幸。(1989年)

とうれしそうです。

このように私の母達はチャックの両親と仲良くカナダで時を過ごし、思い出の数々をいただきます。



## 受胎告知

結婚して三年経っても子どもが出来ずにいた私は、ある日婦人科の医者に診てもらいました。

「あなたは原爆で、女性の機能が侵されているようだから、子どもは産めないでしょう。もし産んだとしても、奇形児が生まれる確率が多いから、産まないほうが良いですよ」と言われました。

私は不順でも毎月生理がありました。何を根拠にそう言われたのかわかりませんが、子どもが産めないなんて、女として、こんな悲しいことはありません。悲しい、悔しい……。家に帰ると一人で涙がかれるほど泣きました。そして、「どうしても子どもがほしい、産んでみせる」と原爆を呪いながら、「私は、子どもを産む」と心に誓いました。

チャックは

「子どもがいなかったとしても、それはそれで楽しい生活ができるよ」

と執着がありません。このさりげない答えに、私は気持ちが悪くなりました。でも、私は子どもを“産みたい”のではなく、“産む”とはつきり、決めたのです。不妊と診断されたのですから、思い上がった考えかも知れませんが……。

私は、慶応病院の産婦人科の澤田先生のもとへ相談に行きました。検査の結果は、卵巣に癒着があるので、卵子が子宮に、通り抜けれられないのだそうです。でも、先生は、

「女性は一生に三度、妊娠するチャンスがあるのですよ。その機会をとらえましょう」とおっしゃり、私は勇気づけられました。

ある夏、みさを母の所に里帰りをした際、倉敷に寄り、大原美術館を訪ねました。館内の絵を次々と見ていて、グレコの『受胎告知』の前で、足が止まりました。処女マリアが、天

使（ガブリエル）から、神の子どもである、キリストの命が宿ったことを告げられるという、聖書からの宗教画です。天使の周りに光が輝いて、白い鳩の舞う神秘的な絵です。私はそこに、立ちつくしました。その時、子どもを産む」と決めた私の願いに、さらに強い希望が湧いたのです。

実際私自身、結婚六年目ごろ受胎告知の夢を見ました。そして七年目、奇跡が起こったのです。妊娠したのです！一度流産の経験があるので、流産しないよう、大事に、大事にして、帝王切開で女兒を産みました。局部麻酔でしたから、意識はありません。

「おめでとう、きれいな女のお子さんですよ」

と先生がおっしゃいました。私は、おそるおそる、

「あのう、手足はそろっていますか。指が五本ずつありますか。五体満足な、赤ちゃんでしょうか」

と聞きました。先生は、

「今ね、あなたのお腹を縫っているのね、忙しくて、そこまで確かめる余裕はありませんよ」

と笑っています。その言葉を聞くと、なぜか安心し、同時に体中に震えがきて止まりません

でした。

その子は、エンジェルのように可愛く「リサ（里沙）・アン」と名づけました。「リサの瞳の中に」という歌（詩）と、ミドルネームにモンゴメリーの「赤毛のアン」。また、大おばあちゃまのアンという名前をとったのです。

それから二年半後、二人目「タミ（多美）・ソフィア」を授かりました。タミも「Tammy love」の歌から、ミドルネームはチャックが通学していたSophia、（上智大学）からとったのです。

新米パパ、チャックとリサの初対面は、新生児室の窓越しにおこなわれました。生まれて初めて見るわが娘、これが本当に私達の子どもだろうか、真っ赤でしわくちゃで……。

「あの、すみませんが、ランメルの子どもに会いたいのですが。間違いないでしょうか」  
と確かめたそうです。今まで新生児など見たことがないので、想像していたベビー像とは似てもつかないベビーでした。

それでもだんだんと父親らしくなり、寝ていると、息をしているだろうかと胸に手を当てたり、泣けば泣いたで、あたふたしてしまいます。オムツの替えはできなくて、ある時など、リサは裸にされ、汚れたままのオムツを広げ、部屋中に臭気を放っています。新米パパはし

ばらくの間、わが子をどのように扱っていいかわからず、不思議な Creature（生きもの）と思っていたそうです。

その頃アメリカの医者が書いた『スポック博士の育児書』という本が流行り、私たちは日本語版と英語版を買って、二人で読み比べながら、子育てのあけくれでした。けれどもリサは育児書どおりにはなりません。未熟児すれすれでしたから、よく病気になる、二人で泣き続けるベビーを前に思案にくれ、あげくの果てに私まで泣き出すしまつです。とくに皮膚が弱く、おむつかぶれほか、体のあちこちに湿疹が出ていました。

チャックは上智大学大学院で社会学を専攻しながら、二つの大学の英語教師、日本テレビ報道部での仕事をかけもっていましたから、勉強、仕事、父親としてフル回転です。私が出かけるときは、リサを背中に負ぶって、机に向かい勉強していました。お風呂に入れる役目はチャックです。温泉好きですから、リサをあやししながら、パチャパチャ、ポチャポチャと愉しそうに遊んでいます。父と早く死に別れた私は、父と娘が喜んでいる姿を見ると、嬉しくもあり、また、うらやましいやらでした。

今にして思うと、不妊症と診断された私に二人もの子どもが授かったのは、神様の哀れみとお恵みだったのです。

『見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。』

詩篇 一二七章三節

『神にとって不可能なことは一つもありません。』

ルカ伝 一章三十七節

『人できないことが、神には出来るのです。』

ルカ伝 十八章二十七節



## カナダへ帰国

「リサちゃんのお母さんは日本人でしょ。どうして、外人の赤ちゃんが産まれるの？」  
「だって、お父さんが外人だから」

「ふーん、じゃ、わたしも外人と結婚したら、外人の赤ちゃんが産まれるの？」

「そうよ」

七歳の桂ちゃんには、信じられません。

「リサちゃん、遊びましょ」

桂ちゃんは学校から帰ると、いつも我が家に来て来ました。おかっぱ頭で、ちよつとり上がり気味の切れ目をして、リサをじっくりと観察しています。リサに何か語りかけながら、まだ寝たきりの赤ん坊、リサと遊んでくれます。自分でジュースをこぼしたとき、

「おばちゃん、リサちゃんがジュースをこぼしたよ」

と言うかしいおじょうちゃんです。

リサは髪の毛が少し縮れて眼が大きく、長いまつげがぐるりと上にカールして、外人の赤ん坊のようでした。とても可愛くて、私はリサを電車やバスに乗せて連れ歩いていました。その都度どこからか病原菌をもらい、始終小児科に通ったものです。母親が被爆者なので、娘の健康には特に注意して過保護に育ててしまいました。色が白で、皮膚が弱く、生まれたときから湿疹がでて、塗り薬を体じゅうに塗っていました。

一方、次女のタミは健康優良児で、ミルクをごくごく飲み、残りのあぶくまで、チュウ、チュウと吸って、大きくなっていきます。小児科の先生が、

「リサちゃんは、お母さんに似て日本的な小柄な子。タミちゃんは、お父さんに似て大きなカナダ人になるでしょう」

と言われましたが、全くその通りに成長していきました。

日本は高度成長の真ただ中。東京は世界で初めての、人口二千万人をこえるマンモス都市となりました。教育問題もその頃から深刻になり、「どこの幼稚園に入れるの」という会話が、母親同士の間で交わされます。

リサは三歳。来年は幼稚園です。当時、日本人の国籍は、父親が日本人であることが条件ですから、日本国籍は取得できません。母親が日本人であることは考慮されませんでした。

そうなる、日本の公立小学校に入学できません。アメリカンスクールがありますが、ここは、駐在員、大使館などの子弟が主で、教育費はその企業から公費で出ていました。チャックは外資系で働いていないので、莫大な月謝を個人負担で払うことになりませう。

子ども二人の教育は日本か、カナダかと考えた挙句、結局、豊かな自然のカナダで育てようと決めたのでした。チャックは幸い、野村証券会社のトロント駐在所に、すんなりと就職が決まりました。

一九七七年三月初旬。チャックは先にトロントに行き、アパートを決めて生活用品を整え、妻と娘二人がやって来るのを待っていました。一ヶ月遅れて私は、難民と間違えられそうなお好で、トロント、ピアソン空港に下り立ちました。一歳になったばかりのタミを背中におんぶし、大きな荷物を片手にリサの手を引いていたのです。四月というのに外は大雪。トロントは寒いところとは聞いていましたが、春の洋服を着ていた親子は、四月の大雪にちぢみあがりました。

チャックの車でアパートに向かう途中、吹雪が舞って視界が悪く、白一色の中でライトを点け、前方の車のテールランプを頼りに、雪の降る町をそろそろと進んでいきます。トロントの吹雪は一晚中、続きました。

翌朝は青空がまぶしいお天気でした。私は日本を出る時、家のものを処分して、手袋も捨ててきました。散歩をしようとも、手袋がないので、チャックのウールの黒い靴下を手袋代わりにしました。リサが

「ママ、ドウシテ、オテテニクツシタキルノ」

と聞きます。アパートの周りを五分も歩いていると、リサが

「ママ、サムイ」

と言います。道で歩いている女性に、背中におんぶしているタミを見て、

「まあこの子、足を出して！ 凍傷にかかるよ」

と、注意されました。後でわかったことですが、雪国の冬は日常でもすっぽりとスノーシューを着せて、滑り止めの付いたブーツを履き、ハット、手袋をして、スキーに行く格好で外出するので。太陽が照って暖かそうなので散歩に出たのですが、五分といられません。温度は多分マイナス十五度ぐらいでしょうか。でもリサは、

「ママ、オソラガ アオイネ、オソラガ ヒロイネ」

と、雪道を嬉しそうに飛び跳ねていました。

カナダグース（カナダの代表的な渡り鳥）になった私は、二羽のひな鳥を両手にかかえて、

下手でも英語を話す生活が始まったのでした。

東部カナダに位置する、オンタリオ州は、日本の三倍の面積。首都トロントは国際ビジネスの中心地です。日本商社、企業が進出し、日本食専門店や日本レストランもありました。バンクーバーで二週間、チャックの両親の家で過ごした時は、既に春の花が咲きみだれ、軒下に吊つてある砂糖水の回りに、ハミングバードが飛んでいたのに……。カナダの西部と東部での気候の違いには驚かされました。また飛行機でバンクーバー、トロント間は五時間半かかり、同じ国でも、時差が三時間あるのも驚きでした。

そして、十一月にはスイートホームを購入。家具は揃つてなく、大きなリビングルームには、白いじゅうたんが敷き詰めてあり、厚いドレープ（カーテン）が窓際についています。家具は最小限のソファードアインングセットがあるだけです。小さな娘達にとつては最高の運動場です。そこに日本から持ってきた最新の山水のステレオセット、四スピーカーのアンプを取り付けて、音楽を鳴らしたら、アコースティックがとてもよく、クラシックの好きなジェットロの古畑所長さんが、レコードコンサートをやるうと決められ、皆さん、壁に寄りかかりながらの音楽鑑賞が毎週一回、夕食後からはじまりました。

古畑さんは、

「このリビングルームの空間をうめるのは、音楽と俺のタバコの煙だ」とご満悦でした。

こうして戸惑ったり、驚いたり、楽しい時、苦しい時と、紆余曲折の流れの中で、私はカナダ国籍をとりました。

カナダ市民になるには、カナダについての知識（常識）の試験があります。私は必死で、州の名前、人口、政治の仕組み、産業、工業など二冊のテキストを勉強したのですが、面接のとき試験官は、

「あの人はだれ？」

と壁にかけてあるエリザベス女王の写真を指差すのです。答えは「Queen Elizabeth」次の質問は

「カナダ市民になったら選挙権が与えられるか」

です。答えは「Yes」。試験官は言いました。

「貴女は合格しましたよ」

私はへなへなと腰がぬけそうでした。その後レセプションルームで祝賀式があり、三〇名ぐらゐの移住者や難民がカナダ市民の証書をもらいました。

国歌「Oh, Canada, My home and Native land、(おお、カナダ、わたしの故郷、母国)を全員が起立して歌います。私はその時、「ああ、私はカナダ人になった。日本の国をすてたのだ」と涙が出はじめました。合唱が「フォルテシモ(音楽記号♩)になったとき、私の嗚咽は大泣きになりました。隣の人が

「貴女、なんで泣いているの」

と訝しがってききます。

「だって、母国を捨てちゃったんですもの。貴女は悲しくないの」

「私はとてもハッピー！ 私の国は戦争でロシアに取られたから祖国が無いの。カナダが私の新しい国よ。I am so happy」

トルドー首相が唱えた多様文化主義は「移民で設立されたカナダ市民が母国の文化や習慣を生活の中に活かすように」といい、これを「モザイク文化」と言います。一方おとなりのアメリカは「メルティングポット」と言って市民はアメリカ国に忠誠を誓い、アメリカ文化に溶け込んで生活しています。またカナダは銃の規制が厳しく、ハンターでも銃の登録をさせられ、一般人は持ち歩けません。アメリカでは護身用にガンやピストルが自由に持ち歩けます。隣り同士でもこのような違いがあるのです。



お宮参り。娘リサ、タミと。(1975年)

『夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。

どのようにしてか、人は知りません。』

マルコ伝 四章二十七節



第六部  
娘たちへ



家族で祝うタミの誕生日。左からチャック、タミ、リサ、幸（1987年）



## ロッキー山脈に招かれて

娘がティーンエイジャーになった頃、日本で暮らすみさを母に胃ガンが見つかりました。手術は成功したのですが、肺に水がたまっており、命が危うくなりました。

「ママ、おばあちゃんの看病に行ったら。パパは大丈夫。私達がみてあげる。でもワイフではないから、自分のことは自分でしてもらおうわ」

と、頼もしい娘たちが背中を押してくれました。こうして結婚以来、親から遠くに離れていた私は親不孝の埋め合わせにと、平成元年、広島に向かいました。

完全看護の広島大学病院でも看護婦の手が足りないとかで、母の個室に付き添い用のベッドを付けてもらいました。これでびったりと母のそばで看病ができます。

母のほどを切開したので声が出ません。そこから肺に酸素を送る機械の音が規則正しく時を刻んでいます。私はのどにたまるタンを吸引機で上手に取ってあげられるようになりまし。会話は私が一方的に話し、母は首を振ったりうなずいたり、手で表情を表わしたり。た

まに筆談でお互いに気持ちを表わすこともありました。

「お母さん、元気になったらまた一緒に旅行しよう。どこに行きたい？」

「ロッキー、ロッキーの山が見たい」

自然が大好きな母です。今までバンクーバーの海、森、ナイアガラの滝、ハワイなどは、みさを母と一緒に家族で旅しましたが、雄大なロッキー山脈はまだ見ていません。

「元気になってロッキーに行こう」

これが病室での二人の合言葉でした。広島の大田川の土手に桜が花盛りの四月、母は個室から大部屋に移り、まもなく退院しました。私は再会を約束して帰国したのですが、秋頃から母は再入院、肺に水がたまり、手術を余儀なくされました。しかし術後の容態が優れず、平成二年一月十日、七十四歳の生涯を閉じました。

思えばみさを母とは、人生の辛苦を共になめ、戦友のように日々の生活と戦い、支え合いながら生きました。初めてみさお母と会ったあの日、

「幸ちゃん、やさしくしてあげるからね」

と言ってくれた通り、とてもとても優しい母でした。

今頃母は天国で、ゆうゆうとロッキー山脈を眺めていることと思います。



## いとしの娘、リサよ

あなたは今、高須のおばあちゃんが憧れていたロッキー山のふもとで、マッサージセラピストとしてクリニックを持ちながら、一人で暮らしていますね。ママがタミを流産しそうになった時、あなたは東京から広島に行つて、おばあちゃんと猫のミーコと一緒に過ごしたことを懐かしく覚えていますね。おかげで元気なタミちゃんが産まれ、あなたの唯一の妹は今二人の子どもの親となつて、ママの近くに住んでいます。でもあなたが遠くに離れて暮らしているのは、親にとつて、とても気がかりなことです。特にあなたは、いろんな病気を持ちながら、一人で



ロッキー山脈を背景に立つリサ。(2010年)

生活していますから。

ママは医学的な知識にうといのですが、初めての子どもは親の毒素をいっぱい持つて産まれてくる、と聞きました。

原爆の後遺症が生まれる子どもに伝わるかどうか、日本政府は「否」と答えをだしています。そうであつてほしいです。でもあなたは生まれた時から虚弱体質で、四十一歳になる今も問題を抱えていますね。

放射能の影響とは言い切れませんが、あなたを産んで以来、ママの頭の中には、折に触れて、「もしや、原爆の影響では……」との疑惑がつきまとっています。

被爆者は、自分が被爆していること、それによる肉体的、精神的な葛藤があることをあまり人に語りません。ママもあなた達娘二人に、まして周りの人たちにも具体的に話したことはありませんね。意識して隠しているのではなく、日常生活に追われて忘れているのと、その体験が、あまりにも苦痛を伴う出来事だからです。

リサは小さいときからかゆみを伴う湿疹ができ、アレルギー体質という診断でしたが、大人になってますますひどくなり、西洋、東洋医学は勿論、ありとあらゆる食事療法、自然療法、運動などを試みましたが、いまだに治るところか、ひどくなっていますよね。ママも被爆の

後、ひどい湿疹ができて、かゆく、搔くとそこが化膿しておできになったものです。医者や薬もない時でしたから、手袋をはめて、なるべく搔かないようにしていました。かゆみが続くといらいらして集中力がなくなり、夜も眠れない。それだけでも大変なのに、あなたは勉強、アルバイト、運動、お稽古事続け、キャリアアーマンになって、自分で体をいたわりながら、今までよくぞたくましく生きてくれました。いつまで湿疹によるかゆみが続くのか解りませんが、あなたは

「ママ、もう心配しないで。私は一生この湿疹とつきあうから。これは私の体の一部分なの。だから、受け入れて、共存していくしかないの。医者も治療法がなく、いつもステロイドの薬をくれるだけ。これ以上続けると、副作用で体がますますダメージをうけるから、もう薬はいらない」

と宣言しましたね。そして、自分で調整し、我慢出来なくなると、薬をもらっていますね。診断は一人に一人という奇病といわれる稀な皮膚病、ダリエー病といわれ、おもに東洋人がなるようですが、お母さんの家系はアレルギー体質なので、それも加わり、ママが被爆したときの皮膚の疾患を受け継いでいるのでは、と不安にかられます。

被爆者は赤や紫の斑点が体にできる皮膚の異常があり、それがでると、体調が悪くなりま

す。被爆者は癌や白血病を恐れています。また、それらの病気で死んでいく人が多いのです。それ以外にどんな病気があるのか、統計的な調査のデータがあるかどうかわかりません。ヒロシマにABC C（原爆障害調査委員会）と呼ばれるアメリカ政府の原爆リサーチセンターがあります、ここで研究された資料は一般公開はされていないと思うのです。

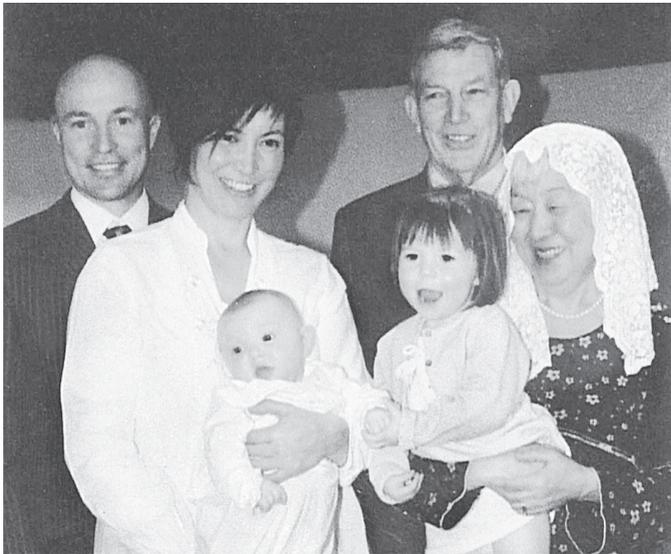
日本ではリサ、タミは被爆二世と呼ばれ、定期的に無料で身体検査をしてもらえますが、まだ一度も検査に行ったことはありませんね。万一、何か病気が見付かっても、被爆二世の病気に対しては何の保障もありません。

リサは、自然の美しいロッキー山脈の側で独立し、小柄な体で全身を使ってマッサージをしながら、病気の人の面倒を見、弱い人の話相手になって生きていますね。あなたの生命力に驚いています。医者にこの子は三歳まで生きるかどうかと言われたのですから。命のある限り、無理をしないで、背伸びをしないで、毎日が喜びと平安でありますように、神様に祈っています。



## 頼もしき娘、タミよ

あなたは現在ママと同じように、カオリとエミ、二人の娘の母親となつて育児と仕事に携っていますね。優しい夫に愛され、健康で悩みがなく、幸せな人生を送っていると周りからうらやましがられていますね。でもいつか人生の壁にぶつかる事があるでしょう。そんな時は謙虚な気持ちで、忍耐を持って耐え忍んでくださいね。人間の力では、どうしても解決できない問題が起こることもあるのです。幾重にも重な



カオリ(右)とエミの祝福式。左がタミの主人、カオリ、チャック、幸。(2012年)

り合った山々の見える家に住み、休日にはロッククライミングを楽しみながら、地球の自然環境を保つ運動に興味を持っていますね。日常生活の小さなことでも、自然破壊に繋がらないよう、気をつけているのはうれしいことです。

これからの世の中は、歯止めが効かないほど、大変暮らしにくい社会になっていくようです。天災地変は頻繁に世界中で起こっています。地球から核は絶対廃止しなくてはなりません。あなたのおじいちゃん、おばあちゃんが受けた原爆の苦しみを思うと、あなたの子供も達、いや世界中の子供も達が、核の被害を受けることのないようにと、核撲滅を心より祈っています。

お姉さんのリサと仲良くね。子どもの頃、あなたはとても強く、リサが友達にいじめられると、かたきをとつてくと勇んでうちを出て行った姿が今も目に浮かびます。正義感が強い反面、もろくもあり、でもどこまでも優しく、いつも、もたもたしているママを助けてくれてありがとう。これからはパパもママも、年と共に足手まといにならないよう気をつけますね。

被爆者の体でありながら、ママが元気に今日まで生きていられるのは、パパ（チャック）という人生の伴侶を神様から与えられたからです。パパは原爆の傷だらけのママと結婚し

て、今日まで支えてくれています。

太陽が皆さんと降り注いでいるようなエネルギーなパパと共に、カナダの自然の中で生活しているので、原爆の悲しみは心の奥にひっこみ、ママもたくましくなりました。でも七十歳を過ぎ、被爆生存者が少なくなっていることを思うと、このカナダで沈黙している時ではないと気付かされました。

ママは被爆者の一証言者として、これからカナダの人たちに、自分の体験を語りながら、核撲滅を祈願していきます。ママの日本語を英語に訳し、スピーチの内容や発音をなおしてくれて、ありがとうございます。タミ一家の幸せを祈っています。

お母さんにとって、リサとタミは神様から授かった最高の宝物です。

『私は山に向かって目を上げる。』

私の助けは、どこから来るのだろうか。

私の助けは、天地を造られた主から来る。』

詩篇 百二十一章一〜二節

第七部  
今、  
被爆者として



みさを母、チャックと原爆ドームの前で。(1965年)

バンクーバー市は一九九八年「Nuclear Weapon Free Zone」、非核都市宣言をしました。バンクーバーの中心地、バラード橋の近くにあるシーホース・ピース・パークには、広島から贈られた平和の火のトーチが燃えています。毎年八月にはバーナビーにあるトラウト・レイクでランタン・フェスティバルが行われています。

二〇一二年十月十三日から、毎日芸術賞を受賞された写真家石内都さんの原爆でダメージにあった被爆者の着ていた衣服の写真展が、ブリティッシュ・コロンビア大学、人類博物館で催されました。同じ時 日本から文化座の『千羽鶴』の上演もあり、広島が見直されました。このように、人口六十万人のバンクーバーで、微力ながらも広島を忘れないでサポートしている団体があるのは、ありがたいかぎりです。私も小さなグループやコミュニティで被爆体験を語っています。



## 被爆者健康手帳

一九五七年、日本政府は広島・長崎で被爆した人に、被爆者健康手帳を発行し、被爆者の健康管理を始めました。被爆者の中には外国人もいます。強制労働のため広島の軍需工場で働いた朝鮮人の多くも被爆しました。けれども彼らは外国人であるため、手帳取得から外されてきました。海外居住者に適用されるようになったのは、二〇〇三年からです。私の場合、一九六五年に被爆者健康手帳を取得。結婚し、子育てのため一九七五年に夫の国カナダに移住したので、最近になってこの恩恵にあずかることができるようになりました。たまに日本へ帰っても、病気になる時は指定病院で診察してもらえと思うと旅行中も安心で、手帳はお守りのように、パスポート、トラベラーズチェックと一緒に持ち歩いています。



## 北米被爆者の検診

広島県は在外被爆者のために、二年ごとに医師団を海外に派遣して被爆者検診を行っています。これは一九七七年に始まったもので、北米の指定病院はアメリカのシアトルにあるパシフィックメディカルセンターですから、国境を越えて行くのに一日がかり。ここ二年ほどでバスをチャーターするようになりましたが、それ以前は皆で車を出し合って相乗りしたものです。二年に一度会うだけですが、お互いに同じ苦しみ味わった仲間。道中は広島弁が飛び交い、そのおしゃべりがまた楽しみでもありました。出発前、ある男性が

「わしの車に乗ってくか？」  
と女性に聞くと、

「あなたの車はケツが痛うなるから、乗りとうない！」

と答えて、昔ながらの広島弁に思わず吹き出したことを思い出します。

メディカルセンターには、地元テレビ局や新聞記者が取材に来ます。ここで、血液検査、

心電図、内科診察、健康相談があり、後日それらの結果が送られてきます。この検診で、ガンや心臓病などの疑いがあると、日本に帰って指定病院に入院でき、それらの費用は広島県が持つてくれます。検診の後は、皆でシアトルの日本食品店にあるレストランで、昼食をすませ、お土産を買って、またバスに乗って帰国の途につきます。

この日のために交通費二〇〇ドルは広島県から支給され、バス代、ボランティアの人たちへのお礼に当てられます。残りはお寿司、うなぎ、お饅頭などで会食をして、お互いの生存を喜び合い、故郷広島を偲び合い、二年後の元氣な再会を願って別れるのです。



## 里帰り検診

白地に赤い十字のマーク、それは広島日赤病院、原爆病院のシンボルです。二〇〇八年の

お正月初め、里帰り検診のためにバンクーバー、東京、広島と懐かしの故郷に帰って来ました。新幹線のぞみ号の車中では、冬の富士山が裾野までまっ白な雪に覆われ、美しくそびえているのを窓越しに眺めたり、駅弁を食べたり、週刊誌を読んだり。日本の風景を楽しみながら四時間で広島に着きました。

かつて原爆で焼け野原となった広島街に、広島電鉄は三日後に路面電車を復活させ、けが人、親戚縁者を探す人、田舎へ帰省する人達の唯一の交通の足となりました。路面電車は広島市民に「広島は復興する」という大きな夢と希望を与え、現在に至っても市民を乗せて走り続けています。モダンなビルディングの並ぶ市内に、ガタンゴトンと揺れながら走る路面電車は、まるでタイムカプセルの中にいるようで、時間までゆったりと流れます。広島駅から日赤病院まで路面電車で約二〇分、私は車掌さんのいるこの電車が好きなので、タクシーを使わず、大きな荷物を抱えて病院に行きました。

入院手続きをして病室で休んでいると、名前を呼ばれて、その日のうちに血液、尿、心電図の検査がありました。翌日から本格的に、内科、外科、神経脳外科、循環器、眼科、耳鼻科と二週間検査が続きます。カナダでは一年以上待たされるMRIの検査も、約三週間以内でやってもらえます。二人部屋の病室は東向きで、朝日が植え込みの間から輝き始めます。

食事もほとんど日本食。医師、看護婦、患者、事務員が広島弁で話してくれ、本当に「里帰り検診」は、故郷の懐の中でゆったりと診察してもらいます。私の場合は年並みの持病はありませんが、大病はなく元気で帰国できました。

同じ時、サンフランシスコから胃ガンの手術のため、また韓国からも一人来ていましたが、原爆患者病棟は殆どが地元の人で、歩ける患者は喫茶室でテレビを見たり、新聞、雑誌を読んでいます。そしてお互いの病状や原爆にあった時のことを話します。患者さん、一人一人の話は同じ原爆を受けたにも関わらず、全部違っていきます。尽きることのない被爆者の証し、言葉にならない叫びが、何らかの方法で世界に向かって、語り継がれていくことを願ってやみません。

その中で聞いた原爆乙女の話は、身につまされました。一九五三年、広島県原爆障害対策協議会が設立され、二年後の一九五五年、米人作家ノーマン・カズンズの尽力により、二十五名の被爆女性がニューヨークに招待されました。アメリカ医師による顔や体のケロイドの治療と整形手術を受けるためです。

人生で女性がいちばん美しくあるべき時に原爆によってダメージを受け、ひきつったケロイドの顔になった若い女性たちは、マスコミによって「原爆乙女」と呼ばれました。米国に

渡った原爆乙女たちの手術はのべ三百回にわたって行われたそうです。その中には途中で亡くなった人、アメリカ男性と結婚した人、養子縁組をしてそのままアメリカに在住して現在に至る人もいます。けれどもこのような人はごくわずかで、多くの人は長袖、徳利首のセーターなどでケロイドを隠し、めったに外出をしないでひっそりと家の中で暮らしています。

あわれあわれ

幾年経ては消えうせん

花子の首のケロイドの色



一冊の本 『ヒロシマ』

愛する幸へ、

今朝から（二〇一一年十二月）幸のことが頭から離れず、この手紙を書き始めました。太陽は太平洋の上にもぶししい光を輝かせています。静かな風の朝、私はコーヒーを飲みながら窓から見える地平線の向こうにいるあなたに思いをはせています。東日本大震災が起こって約一年ちかくなるりますが、私の住んでいるこの小さな Tofino 近くの海岸線に沿って、震災の時の瓦礫が流れ着いてきたことを地方新聞のニュースで知りました。

バンクーバー島にあるファーストネーションの居留地他、まわりの海岸にも、漁船を始め、ボトル、缶、木材などの残骸が波にともなうちあげられました。予想以上の速さでたどり着いたものは調査の結果日本からとのこと。これらは地元の有志により、哀悼と敬意をこめてあつめられ、天災の記念を表わす記念碑がたてられるそうです。

これからも痛ましい破壊物は、この寂しく孤立しているような、平和なカナダ住人の島に、海を越え流れて来ることでしょう。これらの残骸は一日十一キロメートルから三十五キロメートルの速度で、二万一千キロメートルの太平洋を越えたことになるそうです。放射能が含まれている可能性もあり、市は住民の健康をかんがみて、それらの取り扱いはくれぐれも安全を期して行うようにとの指示をしています。

幸、覚えていますか。あなたが何気なくヒロシマの被爆者であることをランメル家族の前で一言もらした夏の日。柳の下のガーデンパーティーのテーブルで、姉エミリーと夫のボブのホストで、いつものご自慢のフランス料理に舌鼓をうっていた時でした。妹、ドロシー、彼女の夫ドン、チャック、ほかに数名の友達がいました。私はショックで持っていたワイングラスを落としそうになりました。幸は今までそんな話を一度もしたことが無いので、あなたが小さな子どもとき被爆したこと、お父さんが爆心地にいて亡くなったことなど、全く寝耳に水でした。幸がランメルの家族になってもう三〇年以上たっているのに、あなたがヒロシマ出身ということさえ知らなかった。でも、私はおもいました。世界で初めて経験したあのすさまじい悲惨な体験を、幸はきつと語るに忍びないだろう。でも私はあなたの個人的体験が知りたかったのです。それであなたに聞きました。「『ヒロシマ』というJohn Herseyが書いた本を読んだことがある?」「しらないわ」とあなたはそっけなく答え、会話はそこでとぎれました。

私はその頃、高校二年、三年の英語教師でした。John Herseyの『ヒロシマ』は、カナダ文部省のカリキュラムにのっている教科書の一つで、私はその本を取り上げて授業をしていたのです。彼はアメリカの有名雑誌『タイム』『ニュー Yorker』の特派員として原爆落下

一年後、広島に行き、当時の状況をくまなく記録、報告して一冊の本にまとめています。この『ヒロシマ』は、学生達に深い感銘と洞察力を与えます。彼らはこの本を基に現代に到るまで、原子爆弾がどのように造られ、地球や人類に影響を与えたかを、年代順に追って学びました。中でも映画の『Fat Man Little Boy』は、ビジュアルに学生達に核による恐ろしさを訴え強烈でした。歴史の先生は、当時アメリカはロシアが日本を北から占領してくることを予想し、日本はロシアの共産主義国になるかと懸念したそうです。何故、アメリカが原爆を日本におとしたか。これについてはいろんな説があつて謎につつまれています。

それにしても、長崎に二つ目の原爆を投下するなど、絶対ゆるすことはできません。

当時の天皇制や神風特攻隊についても学びましたが、戦争を知らないカナダの田舎の高校生にはとても刺激的でした。

二〇一一年三月十一日、日本は再び地震、津波、原発事故という、人間では考えも及ばない惨事にあいました。伝わるニュースの中で、シニアの技師が、危険を覚悟で若者をかばつて、本人自ら原発事故の修理をかってでたことや、配給制の食料や水を静かに並んで譲り合つて受けたり、空き家に入って泥棒をすることなく、互いが思いやり、助け合う、センシティブ

ヴな国民性に心打たれました。これから先、東北がどのように復興されていくか、私はとても関心をもっています。

今一度、John Herseyの『ヒロシマ』（初版一九四六年、以来増刷が続いた）を読みかえました。この本は、なぜか現在絶版になっています。私が持っているより幸が持っているのが好いと思い、プレゼントします。受け取ってください。

世界は、次に戦争が始まると、それは核戦争では、との恐怖につつまれています。幸がヒロシマ原爆体験を書いているとききました、あなたの本が残忍な核の証言となりますようにと祈っています。この地球に二度と核による悲劇があつてはなりません。

今日はこれにて、また会う日まで、さようなら

あなたの義妹サリーより



## ランメル 幸の証し

大好きなお父さん、

私が歩んできた今日までの人生は、何時も主イエス様がそばにいて、私を支えてくださっていたことが、キリスト信者になって確信されました。自分では頑張って生きてきたと思っていたことが、すべて主イエス様によって生かされていることと解り、喜びと感謝にあふれています。最後に私の証しをきいてください。

『主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えない。』箴言 十章二十二節

## 静かな主イエス様のみわざ

私の人生の中で、信じられない奇跡が数えられないほどあります。その中で私の人生のターニングポイントとなったことは、

- 一．一九三七年、乳飲み子の時、子どものない叔母夫婦（進藤一雄夫婦）の養女となったこと。
- 二．一九四五年、世界で初めて落とされた原子爆弾に遭い、放射能の後遺症を体に保ちながら現在七十六歳まで生き続けていること。
- 三．一九六五年、カナダ人と結婚し、子ども二人を授かり、カナダ国籍を取得したこと。
- 四．二〇〇八年、仏教徒からキリスト信者にかえられたこと。

これらの奇跡は、自分で気がつかなかっただけで、主イエス様によって計画されているのです。主イエス様は私が胎内にいる以前から、み手の中で私を守り、愛してくださって、今日まで導いてくださっているのです。

『わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知っていた。』 エレミヤ書 一章五節

## カナダ、我が家の仏壇

実家は浄土真宗で親鸞聖人の教えを仰ぎ、父は熱心な仏教徒で、布教をしていましたから、私は子どもの時から自然に仏様に手をあわせて、祖母と一緒に「南無阿弥陀仏」をと覚えて一日がはじまりました。それは、仏様や先祖に感謝をするという、習慣的な日常の行事の一つで、仏様への信仰の確信があったわけではありません。結婚してからも、里帰りをすると、まずお花とお線香をもってお墓に行き、先祖に挨拶をし、法事的时候はお経を読み、仏法を聞いていましたが、心が満たされるといような感動はあまりありませんでした。

それでもカナダの家に仮の仏壇を作りました。ある時、お寺のお坊さんが来られ、「ランメルさんの家には仏壇がありますか」  
ときかれました。私は、

「はい、ありますよ」

「どこですか。ちよつと拝ませてくださいましよう」

「あのー、仏壇のあるところは……ちょっと……」

「私はね、夫婦の寝室でも、どこでも入って行って拝むですよ」

「それが……」

実はその仏壇は、保存用の缶詰、ジュース、酒、ビール、乾物類、お醬油、お米、塩、砂糖などの食料品が、ぐちゃぐちゃに置いてある、台所の棚の片隅に鎮座ましています。なぜなら、私は戦中戦後の食料難で、食べるものがなくてひもじい思いをしたので、何よりも、まず、家族四人の食料が底をつかぬように、仏様に守っていただきたかったです。その上、仏壇といえども、金銀の細工をした床の間にある日本の立派なのと違い、和菓子空き箱の中に、紙で描いた親鸞聖人の小さな絵を、画鋏でとめ、そのままにお線香、仏飯用にした小さな杯、お数珠が置いてあるだけで、全くのインスタント偶像です。

「先生、ちょっと待ってください。今もつてきますから」

私は仕方なく、その仏壇一揃いをリビングルームの暖炉の上に移しました。先生はそれでも恭しく拜んでくださいました。以来、いつか立派な仏壇を買おうと思っていました。

二〇〇八年、広島日赤病院にて、海外に住む被爆者の「里帰り検診」のため、広島に行きました。成田から、調布に住むカナダのトロントで近所だった友達、久保和子さんと約二十

年ぶりに再会、和子さんのお宅に数日泊めていただきました。彼女はクリスチャンで、私に聖書をくださいました。旧約、新約が一緒になった、かなりぶ厚い聖書で、重たいなど思いつながら、入院用品と共に病院に運びました。その病室は東向きで、朝日が昇ると、私はカーテンを開けて、同室の患者さんと、

「さあー、太陽に感謝しましょう。光をありがとうございます」

と手を合わせました。入院中はたっぷり時間があるので、聖書を読む機会にめぐまれました。

ある日、外出許可を貰い、お墓参りをして、広島の繁華街に行つて仏壇を買う予定でした。友達と会つてお喋りをしていると、時間が無くなりました。結局、仏壇は値段が高いし、重いから次回にしようと思わなまま帰国の途につきました。つまり仏壇の代わりに聖書を持ち帰ったのでした。

## 聖霊の働き

私は散歩が好きです。それも一人で歩くのが好きで、山林や湖のほとり、海岸を散策する

のです。長女の愛犬ジェリーを連れていく毎日のコースは、百年以上も林立している樹木の間を通り抜け、大岩が聳え立っている静寂な山道です。下は溪流が流れ、時々、鹿、コヨーテ、熊に出遭うこともあって、ちよっとスリルがあります。沼地には水花、羊歯、トレールの脇には野花やベリーが茂っています。鳥のさえずりを聞きながら、自然美に圧倒され、何か、見えないものが見たい、聞こえないものが聞きたい、感じられないものを感じたい”と眼と耳と心で捜していました。また海岸では大海の波と水平線に眼を馳せて、大空を仰ぎながら、「このように雄大な自然を創造された創造主はどなただろうか」と自然を賛美していました。私が求めていた創造主は、聖書をめくったページの出だしに、

『初めに、神が天と地を創造した。』創世記 一章一節

とあり、続いて、水、光、空を造られたことも書いてありました。それから、何気なく飛ばして読んでいる聖句のなかに、思わぬ答えが出て来るのです。特に私の長年のテーマであった“目に見えないもの……、耳に聞こえないもの……を探している答えを見つけ、息のみました。

『私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。』コリント・二 四章十八節

信仰のひとつが目に見えない世界を信じたことだとすると、私は信仰に入る前から、主イエス様の啓示によって、それらをさがしていたのです。また目に見えないものに目をとどめる姿勢こそが、霊的な成長の秘訣であると教えられたのも、不思議ですが、聖書が素直に信じられるように、次々と私の疑問の答えが出てきたのです。聖書は世界のベストセラーだから、いつか読んでみたいと思って軽い気持ちで読み始めたのに、まことに聖書は真理であると示されました。

二〇〇八年、聖書を手にしてわずか三ヶ月、キリスト集会のゴッドホルド・ベックさんによつて洗礼を受け、クリスチャンになりました。以来、日々の生活のなかで、これも主イエス様の御愛だ、お導きだ、お守りだ、お恵みだと気づかされ、どんな小さなことのようにでも、大きな意味があり、偶然ではないということ学びました。

## Born Again

ある日、ベックさんが、

「毎日夫婦で聖書を読むといいですね」

とおっしゃり、チャールズは「はい」と答え、朝起きると二人で祈り、聖書を拝読して、一日が始まるというパターンに変えられました。チャールズは幼児洗礼を受けていますが、教会嫌いで、「俺が教会に行くときは葬式と結婚式の時だ」と言っていたのが、改めて、主イエス様を受け入れ、二〇一〇年、西軽井沢のキリスト集会でベックさんによって受洗し、Born Again のクリスチャンになり、主イエス様の十字架の贖いで、罪のゆるしを受け、永遠の命をいただきました。その時聖書から頂いた言葉は、

『もし生きるなら、主のために生き、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。』ローマ書 十四章八節

私が救われて以来、主人、チャールズが救われ、不思議なほど、主イエス様との強い、けれども自然な繋がりを感じています。中でも私が二十代の頃、姉妹のように親しくしていた染野待子さん、三十五年ぶりに、お互いに同じキリスト集会で主イエス様に在っての姉妹となつて、家族も含めて再会したことです。待子さんが、遠くカナダにいる私の安否を気使つて、何時もお祈りしてくださつていたことを知り、祈りは必ず聞かれると確信しました。

二〇一二年三月、二人の孫、カオリ・ブラウン（二歳）とエミ（三ヶ月）は、ベックさんによつて、バンクーバー喜びの集いで祝福式を授けていただきました。

“主はいきておられる”。そのとき孫二人が主イエス様から頂いた心の贈り物です。

ブラウン家族は未だ主イエス様を知りませんが、聖書から次のみ言葉があたえられました。

『主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。その人は、水のほとりに植わつた木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さをしらず、葉は茂つて、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。』エレミヤ書 十七章七節

長女（四十一歳）リサは高校生の頃、主イエス様へ心をゆだね、近くの教会に通っていました。仏教徒である私は彼女の信仰の芽を摘み取るという大罪を犯しました。

ある時、彼女と神様の話をする機会が与えられました。

「ママね。私が食事の前にお祈りしていたとき、ママは私のこと馬鹿にして笑っていたでしょ」

と言われ、覚えてもいない自分の罪を示され、ぎくりとしました。そうです。馬鹿にしていたのです。

『あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また、「何の喜びもない。」と言つ年月が近づく前に。』伝道者の書 十二章一節

『兄弟に向かつて「能なし。」と言つような者は、最高議会に引き渡されます。また、「ばか者。」と言つような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。』マタイの福音書 五章二十二節

あやまつても赦されるものでなく、取り返しのつかない罪を思うと、心は張り裂けそうで

す。主イエス様の十字架の贖いによってこの罪は赦されています、リサの心の傷はどうなるのでしょうか。

私はリサに

『ごめんなさい、と言っても赦してもらえないだろうけど』  
とあやまりました。

「ママ、人間は成長していくのよ」  
と答えましたが、赦してあげるとは、言いません。

『私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。』

ヘテロの手紙 第二・三章十八節

『だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょ。どうか、隠れている私の罪をお許してください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を免れて、きよくなるでしょう。』

私は娘、リサを通して、多くの主イエス様のみ言葉をまなびました。

「主イエス様、 どのようにして、私は福音を伝えたいのでしょうか」と祈っていました。あるカナダの小学校から、私の原爆体験を語ってほしいと依頼がありました。今までにもこの話は何度もありましたが、被爆生存者ということで公に出るのが嫌で、六十年以上も口をとぎしていました。それに心の隅に深く残っている不条理な傷に触れることが辛く、ともに話せないだろうと思っただからです。けれどもキリスト集会の証しのなかで原爆体験を少し語ったとき、ベックさんから「幸が広島に生まれたのは、イエス様の、み業だよ」と言われ、力がわいてきました。「私のこれからの使命は、原爆体験を知らない人に知ってもらい、主イエス様のお恵みによって私が今日まで生かされていることを伝えよう」と決めました。

二〇一一年三月十一日、日本で東日本大地震と大津波が起こり、それに伴って福島原発の事故が発生。歴史上例を見ない、信じられない悲惨な事態が続いています。

二十一世紀、科学の発達により、経済や文明発展は遂げられたものの、その裏に大きなひずみが出来てしまいました。人間のおごり、高ぶりは頂点に達したのではないのでしょうか。物理学者の友人は「今回の原発事故は半分天災、半分人災である。安全性について、世界中の物理学者が気がつかなかった落とし穴があった。人間の力には限界があり、人間の考えは当てにならないのだ」と謙虚に話してくれました。

「どうしてこんなことが起こるの」いろんな説が飛び交い、なにを信じていいか、誰を信じていいか、解決の道はあるか、誰にもわからないのではないのでしょうか。その答えは神のみがご存知です。

このたびの災難をかんがみると、神がどうしてこんなひどいことを赦されたのか。神はいるのか、と神不信に陥る人もいるでしょう。

しかし、聖書の言葉から、神の領域をおかしてしまった人間の奢り、高ぶりの結果が、このような悲劇をもたらせたのではと、思い知らされます。人間が蒔いた種の結果を、私達は今、刈り取ることになったのではないのでしょうか。

『ここまででは来てもよい。しかし、これ以上はいけな。あなたの高ぶる波はここでどまれ。』

ヨブ記三十八章十一節

この本を書くにあたって、主イエス様は、岩手県宮古市で東日本大地震、津波に遭遇された、作家の遠藤公男氏を助け手として与えてくださいました。遠藤先生の貴重なご助言によって、私の思い出はこのような一冊の本になりました。また、原稿の打ち込みをしていただいた佐々木愛さん、編集をいただいた、ふれいざー出版社の宮坂まりさんほか、多くの方々のご協力を心から感謝申し上げます。

そして第2版が日本で増刷されるにあたり、ベック兄はじめ多くのキリスト集会の兄弟姉妹のお祈りとご協力を賜ったこと、さらに奇しい主の導きによって、増刷の取り次ぎ連絡を國川兄がご奉仕してくださったこと、新生宣教団の中村兄の編集をいただいたことを心より感謝します。

戦争の悲劇、怒り、苦しみも主イエス様を信じることによって、悲しくても平安になること、罪赦されることを知りました。まだ主イエス様を知らない方々や家族や友達が、一

日も早く主イエス様を信じて救われますようにと、お祈りしています。

二〇一三年 七月

『キリストこそ私たちの平和です。』 エペソ二章十四節

## Epilogue

These pages are a sketch of the life of one person – Sachi Komura Rummel. They concern the family she grew up with, her experience as a victim of the Hiroshima atomic bomb, loss of her father, her meeting with Charles – her husband, and her meeting with the Bible and Jesus.

Personally speaking, having lived seven years in Fukushima prior to the Tohoku earthquake and meltdown of the nuclear reactor, I have encountered numerous young residents of the area exposed to radiation, experiencing both health problems (real and imagined) and social stigma similar to the victims of Hiroshima. Particularly those young people approaching marriageable age are experiencing social stigma from the families of their potential partner. Perhaps many in Hiroshima faced the same problems of health and social stigma.

We pray that through the blessings and love of Jesus we human beings shall no longer have to suffer the effects of atomic radiation, and this book will reach many Japanese people and bring them closer to God.

In this world of Satan, thanks to Jesus, the life of Sachi, to date, has been blessed.

Sachi's husband, Charles



### 【著者略歴】

**Rummel Sachi** (好村 幸)  
こうむら さち

1937年東京生まれ。  
8歳のとき広島で原爆をうける。  
山口県立萩高等学校卒。  
1965年カナダ人と結婚。  
1976年カナダに移住。  
2008年キリスト集会で受洗  
現在、拓殖大学カナダ提携校現地主事  
ブリティッシュ・コロンビア州  
スクワミッシュ在住。  
二女あり、夫と2人暮らし。

忘れないで ヒロシマ

定価300円(税込)  
(第3ゲストハウス建設に寄せて)

---

2013年 3月	初版発行	カナダ・Fraser Journal Publishing 社
2013年 8月	第2刷発行	
2013年10月	第3刷発行	
著者	幸・ランメル	
発行者	幸・ランメル	
		205, 1212, Main Street, Squamish, BC V8B, 0S1, CANADA
連絡先	國川 憲三	
	〒167-0051	東京都杉並区荻窪1-32-4
		メールアドレス:mkuni93@aol.com
印刷・製本	新生宣教団	

---

©Sachi Rummel 2013 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

